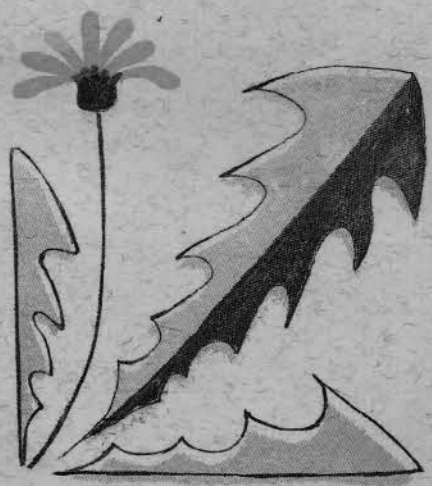




LEONTODO

27?

N-ro 25-26



1962

Septiembre

ANTAŬPAROLO

Karaj legantoj en kaj ekster Hokkaidô!

LEONTODO de Hokkaidô nun salutas vin post longa intervalo---ja tre longa, post unu jaro kaj naŭ monatoj. Leontodo---nia organo, ne aperis dum tiu longa tempdaŭro, tio ja estis granda domago al nia movado. Pro kio okazis tio? Estis diversaj kaŭzoj, manko de laborantoj ktp, sed ni devas ilin venki kaj venkos iam, kiel nia majstro Zemenhof diris:

Sed venkis ni ilin kaj velas kun ĝoj',
Al verda haven' de l' homaro. (Tagiĝo)

Nun ni devas rompi la longan dormon. Post longa dormo vintra, en Hokkaidô, ĉiuprintempe ekvekigas la naturo, ekfloras ĉiuj floroj samtempe. Tiam unue ekfloras freŝflavaĵ leontodoj anoncante la viziton de printempo, la sezono de reviviĝo kaj verdiĝo.

Nun nia LEONTODO reaperas, do ni havu nian verdigan sezonon en Hokkaidô! Post 3 jaroj ni havos Universalan Kongreson en Tokio. Por ĝi, en ĉiuj partoj de la lando gesamiceanoj preparas fortigi niajn vicajn.

Ankaŭ en Hokkaidô la 26-a kongreso (ĉijara) decidis la fondon de Junulara Organizo. Nun ĝi ekmarŝas. Leontodo anoncas revivigon, verdiĝon---de novan kreskon de nia movado, kaj J.O.---la juna forto ĝin efektivigos. Kiel la estonto de nia juna forto, fiere floru leontodoj sur tiu ĉi norda tero!

(Acuŝi Hoŝida)





脇坂さんを送る言葉

脇坂さん

あなたは、小樽の、吾日本のエスペラントの仲間達の中で、最も古い先達の一人でありました。

すでに早くも数年前から国際語の必要を認めて、この運動に加わり、日本エスペラント学会が発行する雑誌“Revuo Orienta”にもアイヌの伝説や小樽の古代文字などをエスペラント文で発表し、小樽に脇坂圭治ありの名を広く知られていました。

戦後いち早く再び運動を起そうと、これも今は亡き藤川曾蔵さんと一緒に私共を助ねて、道内では真先に運動を復興した発起人があなたでした。当時はその職場の岸鉄工所の若い人達を励まして元気なエスペラントの同志を集めてグループを作り、大きな力となりました。また、私共が出した小さな雑誌“Leontodo”にも度々そのすぐれた文才をもつて数々のエスペラント文の創作や翻訳を発表して下さいました。多分、未発表のものも多徴あることと思います。

しかるにあなたは、不幸にも戦後の混乱の中に巻き込まれて職を失い、長い間苦しい生活に堪えなければならぬようになり誠にお気の毒でした。その間何のお力にもなれず申訳けない次才ですが、近頃になつて再び岸鉄工所も再興し、あなたも元の職場に復帰できて私共もようやくホッとした思いでいたところ、今度ははからずも重い病気に見舞われ、病院のベットに苦しんでおいでと知り心を痛めました。しかし、自分ではなかなかお元気で、私共に対しても、やがて年末には退院できるだろうというお便りを下され、つい数日前にも自ら年賀状を認め、それにもやがて元気になつて会いたいとありました。苦しい中にも最後まで希望を捨てなかつたあなたの精神力には心から敬意を表します。たゆまず何ものにも屈せずエスペラント運動に尽された力もこのたくましい精神であつたことを思い、後にのこされた私共の心に長く忘れることのできない人として生きて行くことを信じます。

小樽の、吾日本のエスペラント運動に大きな足跡をのこして逝つた脇坂さ

人を対する言葉といたします。

Chase de morto de nia estimata samideano S-ro Keizi
Wakisaka, ni esprimas alkonan kondolencan en la nomo de
Otaru Esperanto Asocieto

Vi estis granda Esperantisto tute energia en Otaru
kaj en Japanujo. Ni ne forgesos vin por ĉiam kiel nia
gvidanto!

Dormu trankvile por eterne sub la Verda stelo!
Estu Dio benata!

昭和37年1月7日

小樽エスペランティスト協会
山 賀 勇

☆☆☆☆☆☆

Dormu trankvile por eterne sub la verda stelo,
nia estimata samideano S-ro Wakisaka!

小樽 高橋 達 治

新葬式もめがらの1月5日朝晩、佐田さんが訪れて佐賀さんのご遺
体をご覧くださいました。午後7時、すい焼ガンの病室に亡くられたというこ
とです。佐賀さんが入院され、それが不治のガンであること告知されて、
既に大分お静しみを願っていた僕でもあり、来るべき時が来てしまつたとい
う、また、別の寂しみが僕の心を暗くしました。江戸さんのお話しで、私が
全休中であつたり、小樽エスをの代役として探訪に訪ねてほしいという
ことやお引越かし、看護、回診先生を訪ね、行合ををし、在野の同志の故人
にも感謝すると共に、葬儀をあつめ、倉き花輪と小樽妙国寺の葬儀に参りま
した。

1日夜中過ぎ、江戸さん、早川さんと列席。寒い道程の手、香取の御心葬
の御見と好。そこに黒い裾裾に刺はれて居られた佐賀さんの写真に涙がして
お前にお前は亡くられたのか、いや、それはもうお前だというより友だ
いの御心葬が遺体するばかりでした。

1日朝7時から同じく妙国寺において葬式が行なわれました。山賀先
生はじめ前記の方々が列席いたしました。ご親友のほか、藤原さんの勤務
先の厚板工所、長女御遺子さんの物心先の玉島ヨム、長女御遺子さんの勤め

先の運動メロの代表の方々、脇坂さんの人脈を慕う近所の方々も列席されて盛大でした。あいあいとした業望の中にも感傷に読証が述べられ、やがて洗香、最後に山賀先生がひとり脇坂さんの前に立たれて悲しい告別の言葉を贈りました。“Dormu trankvile por eterne sub la verda stelo!” エスペラントではいい言われたようなこの言葉が本当に実感をもって、脇坂さんと緑の星の具象になつて私には見える気がするのです。祭壇に立たれた山賀先生も私と同じものをごらんになつていられるのでしょうか。エスペランティストがエスペランティストを送る　そこに死者の魂と生者の魂にふれあうのをみた気持がしました。

花に覆われた脇坂さんの変わり果てたお姿が見えなくなつて、白い新雪の雪道をふみしめながら私たちはただ黙々と家路につくばかりでした。

7日夜5時から忌中引があり、奥様やご親戚の方々とも親しくお話しすることができました。江口さんが、昭和9年頃の小樽エスペラント会の写真数葉を持参せられて、奥様や2人のお顔さんにお見せし、皆々新たな感慨にうたれたご様子でした。写真には、脇坂さん、江口さんが仲よく並び、故藤川香蔵さん、それに札幌でご活躍の高橋要一さん、坂下清一さんのお姿も見えています。写真の雰囲気はすべて若やいた青年エスペランティストたちのグループのもつ独特の姿であり、何ともほほえましいものですが、私は、あの当時の青年が今は50才余りの人五になり、そしてその中にすでに亡くなられた方が2人もあるのをみて、何ともいえない気持ちになつてしまいました。

江口さんは、昭和7年頃エスペラントを始められ、講習会で脇坂さんを知られたということから、脇坂さんがすでにその時エスペラントを知つておられたということから、脇坂さんは、昭和6・7年頃からエスペラントを学ばれていたこととなります。間もなく Reyuo Orienta誌上にアイヌの古語を訳したり、エス文小説類を読まれる等、文学的なものに強い関心をもつてエスペラントを学ばれたようです。しかも、岸鉄工所内は勿論、附近の真栄町で初等講習会を聞く等、アクティブなエスペラント普及運動も続けられ、小樽エス会の中心人物であつたわけで、本当にエネルギーな方でした。大塚に入ると特高の重視がうるさく、岸鉄工所内にもまでいやがらせがいつたとか、随分苦勞をせられたということですが、昭和17年、君恵夫人と結婚せられたことがその頃の最大のおよろごびであつたことでしょう。戦後は、

兼川さんと
でも早く
岸鉄工所が全
苦しい生活を
つた葉など通
気が挨拶する
の類でなり立
れることも少
私たちが心を
が生れた強
て下つた
去年9月
とき、今度
のと大いに
きには、脇
てしまいま
らの運動に
12月一
つては。
12月1
る脇坂さん
て困るが、
会いした
た。そして
う不況の日
れ、かえり
いはが4
元年57
まだ卒業
し、その
志りまし

藤川さんとエスペラント復興をいち早く提唱、山賀先生をもちりたてて道内でも早くエスペラント活動を再開せられました。ところが、昭和26年に身障工所が企業縮少のやむなきに至り、このため、藤坂さんは失業し、以後苦しい生活を続けなければならませんでした。失業者にも出られ、雪の積った朝など通勤路上で藤坂さんが銀線車近くの事業場に行かれるのに出合い気が挨拶すると俄文をもつて応えられるのですが、向となくさみしそうで気の毒でなりません。そしてまた、このようなことから、例会に出席されることも少くなり、時たま、デモンストラにも出席されても余り興奮されず私たちも心を痛めました。しかし、このような間にも、私たちのLeontolo 係生れた頃には「女大学」のエス紙や制作雑誌など、立派なものを寄附して下さいたり、先達として私たちの大きな心の柱となつて下さいました。

去年7月身障工所が復旧し、藤坂さんが復職されたと江口さんから聞いたとき、今度はきつと例会にもデモンストラにも明るい笑顔で出てこられるものと大いに期待いたし愉快でした。ところが、次に江口さんにお会いしたときには、藤坂さんが病氣入院、しかもその病名がガンと聞いて全く暗然としてしまいました。折角藤坂さんに早急が訪れた女先なのにと、そして、私たちの運動にとつて大きな期待も裏切られてしまいました。「藤坂さんは12月一ぱいもたないかも知れません」という江口さんの知らせを聞いてしまつては。

12月17日、山賀先生宅でデモンストラを開き、そのとき山賀先生あての藤坂さんの手紙には、お見舞いに対するいろいろなお礼と、病氣が及びいて困るが、今月(12月)末頃までにはきつと治つて一日も早く皆さんにお会いしたいという強い希望を、例をきちようゆいな自尊でのべられていました。そして不安な1961年11月は形なもにとつて悪い知らせでも、という不安な日々でしたが、病院での藤坂さんは、本来の精神力で明るく生きられ、かえつて私たちに希望を与えてくれるようにさぶらわれたのですが、病いは烈々藤坂さんを死へと導いていたのです。藤坂さんは1962年、数え年57才のお正月を折檻で迎えられ、江口さんにお見舞した1月6日朝はまた早業に変わらぬ元気な口調でお話しもされていたといふことでした。しかし、その夜病気が急変、遂に7時10分絶しい最後の息をひきとられたのであります。

定期エスペラント強化会館に参加して

Tomarkmani; Jasuko Moniĉa

期 限 '61. 12. 25 ~ '62. 1. 2
場 所 京都府亀岡市天恩郷
参加費 3,000円 (食費、宿泊料含む)
募集人員 50名 (英語はほ5名)

上記を関西通関紙"La Novado"で知りましたので参加いたしました
大まかの日程を示しますと次表のとおりです。

時 日	'61 28	29	30	31	'62 1	2	3
3.30	開講式 中級クラス 分け	レッスン	中級 合間レッスン	レッスン	"	"	エクスカーション
5.00	初 中 合同レッスン						記念演奏 テイクンオーバー 午後別荘
6.00							
5.00	XJ総会	自習	自習	忘年会	新着部談会	奉拜大会	

予定を越えた中級をテスト(手紙を書くこと)によつてA、Bのklaso
に区分されました。 A klaso 初級を卒業した程度の人

B klaso 大部分が先生格のベテラーノ

私はA klaso に属しましたので、以下A klaso について記します。

★第1日目 クラス分けとB-inoウスターとB-ro イーの parolado
(約3時間) もちろん tute esperanto (当日は初・中合同レッスンで
したので、ベテラーノが traduko, nur aŭd. の私も助かりました)

★第3日目 第1日目の parolado の続き

★第2、4、5、6日目のこの間3度の parolado (2~3分) をさせられま
した。 parolado といつても、下書きをしたり、時には日本語が飛び出し
たり、さまざまでした。授業は esp. 7 jap. 3 といつたところです。

(B-inoウスターのときは tute esp.) また、テキストは、全

語彙をたたくだけではなく、一部分を抜すいて進められ、そのほか、身近かな事を中心としたり、時おり、歌や気かそえなども折り込まれました。

☆オケ7日目 この日は ekzameno と テーバータイで、午後には 解散
ekzamenon は、esp 文和訳、osp 文を聞き書き取り、更にこれを和訳、
文法、和文 osp 訳など

上記のほか、夜の幻燈会、忘年会、新春放談会、oratora konkurso 等
が tute esperanto で行なわれました。

省りみまして、一週間というものの esperanto で明け、暮れたようなもの
です。最初は一言も出なかつた人（私もその 1 人ですが）も帰る頃には片言
の esperanto を話すようになりました。そのような零団気の一週間でした
今までそのような機会を持たなかつた私には、それは非常に収穫であり、ま
たしげきでもありました。とにかく意義のある一週間だつたと思います。

('62, 2, 16)

~~~~~☆☆~::~~::~~::~

Disciplinado por parolkapablo de Esperanto  
に 参 加 し て

Tomakomai; Hitomi Kitabatake

たまたま、わが会で購読している MOVADO を gvidanto から渡されたとき、最初に私の目に入ったのは、エスペラント普及会主催の冬期強化合宿が  
亀岡市で行なわれるという記事であつた。年末年始の休暇を利用すれば、休  
暇をあまりとらなくてもよいので参加したいと考えた。しかし、エスペラン  
トを習い始めてからこの 1 年間に、時間にしてどれだけやり、単語はどれだ  
け覚えているのだろうか。ほとんど話したことのない私に、はたしてこの強  
化合宿にたえられるだけの KAPABLO があるのだろうかと心配になり、も  
し KAPABLO の点で参加できないとしても一応問い合わせたところ S-ro  
藤田から懇切な返答をいただき、私でも何とか参加できそうに思えて F-ino  
Moniña と参加することにした。これまで話す機会がなかつたということは  
私の場合適当でないけれども、gvidanto が esperanto で話しかけてくれ  
ても、何んだとかかんだとかと言つて日本語で話してしまつていたし、また

あまり他の esperantisto との接触もないままにすごしてきた私には、この  
ヒニスベラントに関して盲目でないだけがまだしも幸いと思うだけ、ほとんど  
オソ、ツンボのようなもり。しかし、去産能力促進といつたこういう会に  
参加できら機会は、これからもあまり待てないことだろうし、できるだけ参  
加すべきだろう。世々の esperantistino になるために……。とにかく  
私たちが現在こうして日本語を話しているのは耳から聞いてできるようにな  
ったことから、この際 "Mi estas infaneto an esperantujo" ときめ  
こんで耳だけでもならそう。tute esperanto の生活を「週刊すれば、せ  
うて Bonan tagon 位は簡単に口から出るようになるだろうと考えた。

すでに elementa kurso が一応終わっているということで中等科に申し込  
んでいたの、開講式後、中等科への申込みが多いので同じような KAPABLO  
の者で分けるということで、手紙を渡かされる（勿論、辞書の助けを借りて）  
その結果私は B klaso に入れられる。そこであらためて B klasanoj をみ  
ると、開講式後の「中等科」で B-ro Itco と S-ino Worcester  
の parolado を resuso した人ばかり。そんなわけで、何のことはない、赤  
ん坊が大入の中に、人ではおり出されたも同然だけれども、私の場合、この  
会館に参加した目的は、話すことができないから、すこしでも話すことがで  
きるようになるために、また、書くことさえ完全でないし、聞くことにも馴  
れていないのですこしでも聞けるためにということであつたので、この「週  
刊のうちに何かすこしでも得て帰ろう。そのために思はかき捨てたという気  
持であつたので、すこしは気が楽であつたし、F-ino Moniŭa とはレツス  
ン以外はいつも一緒でいられたことは何かにつけて心強かつた。

B klaso での最初の leciono の sinprezento の時、まず、"Bonvole  
gvidu min" とお願いしておく。北海道から参加したという物珍らしさゆ  
ぎ手紙つたわけでもないだろうが、とにかくいろいろとみんなが親切にして  
くれる。また、S-ino Worcester が開講式後の parolado が始まる前に  
"Kiu venis el Hokkaido?" といつて、わざわざ大きな体を私たち 3 人  
のところに来て大きな手で握手され、小樽に行つて来たと話しかけて  
くれるが、海軍に返事をすることができないのがもどかしかつたが、その後  
1日の新年会の折に、せめて一言でも話してみたいと F-ino Moniŭa と  
S-ino Worcester のところに行つて話した。そして、真に暖かき北海道

に行くので、そのときはあなた方を忘れないでいて必ず訪ねましようとお約束してくれ、北海道のことについて聞かれるが、つまづきながらも何とか単語が口から出るのが不思議である。しかし、熱心なことには、受講者の先輩のことは、gvidanto からきかされているにすぎず、名前がけより知らない人がほとんどである程には、先輩の消息をきかされても驚かす術がないのが、日本大会のとき同様に熱心であった。

ちて esperanto で強化ということは覚悟の上で参加したのであつたけれども、B klaso での leciono は私にとっては相当の負担であり、また、tema pri といつたような leciono は、日本語でされる容易でないものが、esperanto ではどうして手に負えたものではない。ほんの五分か十分の parolado さえも原稿をみなければならぬし、いき taksto を書き添えて読むと、覚めるはずの単語さえもつまづいたり、traduko さえも書き添えたあとに単語の意味を忘れてしまふといつた調子、それでもできないときは、とつとに "Bedaŭrinda mi ne povas traduki" と口から出たときには、わたしが結構とちいたりした。その日に 5-10 雑田から "どんな具合か?" ときかれ、"まるで幼稚園と中学文の合同レッスンのようだから、皆と一緒について行けるかどうかわからないので A klaso の方に変えてもらいたい" といつたところ、"わざわざ出かけて来たのだから、この機会に話すことはさもなく、耳を磨らすに付でもよい経験になるもだし、それがまた話すことに通ずるのだから悪習を吐かずに頑張るよりに" と言われた。余り程である。しかし、その時けさまで毎日、ただ esperanto の音を耳に入れるだけで一歩の状態であつたけれども、昨の席の都立山から参加された 5-10 正座等に助けられ方づけられていた時でもあつたので、これからやはり悪習を吐くことにやめしようと思つた。

ともかく 1 週間、話すこと、聞くこと、書くことなどの最もよい lernado の方法について、それぞれの gvidanto から本当にかんで含めるように教えられた。このことは、このときはじめて聞くことではなくて、mia gvidanto からいつも言われていることであつたが、こういう合席にお加して聞くと一つ一つが成程もつものことだと思ひ、今までの不勉強もさることながら、gvidanto には申しわけないと思つた。帰つたら、

できるだけ実行  
毎日の leciono  
5-10 Wordo  
つたり、本当に  
も、非常に gvidanto  
のうちは必要で  
一つとして必要

いろいろな人  
できたことは、  
な意味で私にと  
して、私は私のみ  
る。そして、て  
の向上につとめ

短い 1 週間の  
り、合宿し、学  
お互に更に精進  
えば、会話能力  
例えば、グルー  
をも指導すると  
な方法をとつて  
合に……。

このような合  
北海道から参加  
全体的にも。学  
級を待っている  
きない場合が多  
なるだろうし、  
より発展するの  
isto をつくる  
るのだが……

できるだけ実行に移し、これまでの勉強方法も変えなければと痛感する。毎日毎日の *leciono* が有意義であり、また、印象に残っているが、なかでも *Sino Worcester* の中等科の合同レッスンに、紙芝居 "*Ora risto*" を使ったり、本当に体中で教えるといった *gvidoj* は、完全の理解できないとしても、非常に *gaja* な気分で理解できた。やはりこういう *gvidoj* の方法も初級のうちは必要であろうし、また、*Sino* 藤本の書取りも、耳を馴らす方法の一つとして必要な *lernado* の方法だとも痛感した。

いろいろな人に助けられ、教えられ、何とか1週間の合宿を終えることができたことは、初めて参加したからということばかりではなしに、いろいろな意味で私にとっては非常に大きな喜びであつた。そして、この合宿をとおして、私は私なりに何らかのことを身につけ、方向を見出したつものである。そして、できることならこのような機会の度毎に参加して、*KAPABLO* の向上につとめたいものである。

短い1週間の合宿であつたけれども、100人余りの者が同じ目的で集まり、合宿し、学び、話し、楽しめたことはこの上ない幸いなことであつたしお互いに更に精進を誓い合い、再会を約して合宿を終えたわけである。難を言えば、会話能力促進という趣旨で、初等科をも合めて合宿したのであるから例えば、グループ毎に *gvidanto* 級の者がついて、本当に身近かな日常会話をも指導するといった方法をとるとか、自習時間にもすぐ質問ができるような方法をとつてもられたならば、更に効果的であつただろう。特に女子の場合に……。

このような合宿訓練を北海道で計画、実施してもらえないものだろうか。北海道から参加するということにやはり容易なるのではない。時間的にも、金銭的にも。学生のように休暇がある者ならば参加も案外容易であろうが、教をわづけている者には、参加したい希望があつても時間的な制約から参加できない場合が多いと思われるので、せめて道内であればもつと参加が容易になるだろうし、道内の *samideo* との接触もできて、わかれの運動が、より発展するのではないだろうか。世界大会を控えて、話せる *esperantisto* をつくることは急務のそして欠かすことのできないことだろうと考えるのだが……。

(17th. Apr.)

### ダンケルさん 同行記

#### 札幌～苫小牧のまき

サツポロ 永田 明子

日本エス学会サツポロ支部長であり Delegito であるアリマさんのとにろをたずねたダンケルさんは、4月7日19時すぎにアリマさんにつきをわけて N H K に木村さんを訪問。アリマさん自身は釧路市へ出張のためわれをつづ、そのあと連絡をとつてあつまつた高橋さん、吉原さん、児玉さんらと会見。午後サツポロエスベラント会の事務所をおく吉原法律事務所を児玉さんの案内でおとすれ、そこで会員と電話連絡をとつていた私と握手をかわして二百三宮挨拶をしたのち、ひとあし先に帰つた吉原会長が執務中のよこで新研究成果をタイプでボンボン記載しました。題して *Japanaj Gentilesoj*。かれはものすごく、日本人にはそう感ずるのか、せたいがある。お世辭にも深潔な感じをあたえるとはいえない身整な長途の旅行のあとがうかがふ、西画家とはこうあるものなのかとおもわせる反面をもつている。

それから1時間ほどして、Veterano 西里さんが有訪訪にあつた、責任が軽くたつたよこでホッとする。ダンケルさんは西里さんと心霊学やら人接等について、深くつづこんで話した。わきで辞書をひききき耳を傾けたが、専門的な話題と立っともう全くついていけない。あまりにもひききければならない単語が多すぎる。勉強不可をなげいたが、今回は間に合つた。

トマコマイ市の星田さんやムラン市の平田さんに電報で連絡するため外出していた児玉さんが事務所にもどつてきたころ、そこにいせひとは全部、ダンケルさんに *mans stampo* をとられていた。これはインド人のだ、これはイスラエルのだ、といつて種々の型を見せてくれ、あまり愉快でないことには、私たちのも人相を凝視したのち記号でいろいろな形態に分類していた。

5時半になると連絡のついた会員が1人、1人みえはじめた。麻務の密田さん、新入会の田中さん、N H K の木村さん、ヒラノ E K の高橋さん、藤魚大の山崎先生、学大の河野先生。これで吉原会長、児玉さん、西里さん、それに私を合わせて10人となり、みんなでメン類を取つてへらごなし。

Vogtaristo のダンケルさんは、肉、さけ、コーヒーはすきでないといふ

にことわつてあ  
 キンチくらの  
 にはチヨット奇  
 イツの迷宮をひ  
 てきたものとみ  
 運歴をかたりた  
 たりになると西  
 持ちで、正統派  
 やがて、時に  
 手をかわしその  
 翌日朝、白  
 んと私は、耳か  
 に幾分心細か  
 つつひいでた人  
 出勤途上の吉原  
 つけた。とこ  
 わしく「通用  
 おび「全国中  
 の時間が気がか  
 直接改札の人  
 してもらつて  
 所にいつては  
 まつたら、と  
 車中で精算し  
 木村さんが見  
 完車したす  
 とがわかつて  
 かわい子ど  
 が見てしま  
 て、これはカ  
 スラエルのと

にことわつてあつたので、こちらもそのように配慮した。食事がすむと、10  
キゾチくらいのおごひげをもつ、いくぶんカギバナの、そしてなれないもの  
にはチヨット奇異な感じをあたえるグンケルさんは、タープロいっばいにド  
イツの地図をひろげて故郷 Puld 町をさし示し、何回も同じことをしやべつ  
てきたものとみられる流暢さとおちつきをもつて、家族のことやかれ自身の  
遍歴をかたりだした。アフリカでイギリス政府に逮捕されたときの体験談あ  
たりになると西里さんの通訳に意気疎通をたより、みなそれぞれに複雑な気  
持ちで、正統派ユダヤ教徒のおくふかくに存するものをみつめようとした。

やがて 8 時になると、グンケルさんは出席者のひとりひとりとわかれの握手  
手をかましその夜をすごすため、吉原会長宅に案内されていった。

翌 8 日朝、白老まで案内してあげるようにと会長からいわれていた増田さ  
んと私は、耳から入るエスペラントと辞書におんぶさつた 1 日がはじまるの  
に幾分心細くなりながらサツボロ駅で待つていと、混雑する人々の上に頭一  
つ分ひいでた人を発見してすぐそれとわかり、近寄つて朝の挨拶をすませ、  
出勤途上の吉原会長にわかれをつけ、すでに改札のはじまつたところに向け  
つけた。ところが he, ve! かれがもっているパスが無効だという。英語でせ  
わしく「通用線がもがいます」と宣告されたグンケルさんはいかりの表情を  
おび「全線中のれると書いてある」と英語でかかれたパスを示したが、発車  
時間が気にかかる私は小さな括弧で印刷された英語を読む落ちつきを得ず、  
直線改札の人にどうすればよいかをたずねると、精算所に行つて払い戻しを  
してもらつてあらためてドトセまわりで買つてくださいとのこと。一応精算  
所について探したが先写があるし、そんなことをしているうちに発車してし  
まつたら、と心配な私はそのまゝ列車に乗ることをグンケルさんにすすめた  
車中で精算してもらつてもよいのだと増田さんからきいて原をおちつけると  
木村さんが見えて、何か要件を話していった。

発車したすと、さつそくパスを眺んでみたが、国鉄線であれば問題ないこ  
とがわかつてホツとした。心配がなくなると、グンケルさんはポケットから  
かわいい子どもが写つている家族の写真をなつかしそうにとりだし、私たち  
が見てしまうと、こんどは持参のおおきなズダぶくろからいろいろとりだし  
て、これはカメオカ市の某宗敬団体からもらつてきたものだから、これはイ  
スラエルのともだちだとか、このイスラエル人と文通しないかといつて住所



視から F-inoj 増田、永田、若小牧から 3人で、S-ro Gunkel と計 6人となる。うまく車中で席がとれたので、まず、memprezento から。

まず komencantoj はききとりがオ！と、かれにたのむ。"Ĉar ili estas komencantoj, ili povas kompreni bone, se vi parolos pli malrapide", かれは "Ho, mal-ra-pi-de" と模範を示す。そして mapo で lia loĝejo Fulda を中心に Frankfurt (フランクフルト)、Nürnberg (ニュールンベルグ)、Stuttgart (シトウツトガルト)、münchen (ミュンヘン) などよく聞く名前の都市の位置関係をみたりしているうちに白老につく。ちょうど昼どきなので農業会館階上で昼食。S-ro Gunkel が viando も alkoholo ĝo もとらぬので、結局卵どんぶりとなつた。ちょうど土曜日の午後とあつて、町役場は休みでかれの studio のための照会ができない。隣の tablo にいた役場の人にきいて、ともかく行く。誰かが宮本會長方へ連絡したとみえ、迎える準備がしてあつた。

ところで S-ro Gunkel の studio なるものがちよつとあまりないものである。S-ro Sekelj も antropologo であつたというが、かれは、antropologo のうちの unu fako である manstampo の kolekto, studio のみをやつているとのこと。Sapporo-anoj は皆すでにとられたというが、まず私から。Nomo, naskiĝdato を書いた上、用意のインクを塗つて形をおす。ainoj にも同様に協力してもらふ。といつても、かれら turisma komerco である以上、ただではすまぬ。「集まつてもらつて仕事ができなかつたんだから男 200 円、女 150 円位でも……」となる。その総計 800 円を、S-ro Gunkel これまたこういう場合の無銭旅行者のオハコ (処理法) "Mi ne havas monon" でこたえ、結局 500 円でケリ。

きて所で室乗行きの列車には 2 時間程ある。駅前の休憩所に入り雑談。

S-ro Gunkel は juda deveno である。とすると、すぐわれわれの脳裏によみがえるのは、「13 階段の道」、「吾が斗争」などの映画、「アウシュヴィツ」、「アンネの日記」等々多くの記録にある戦時中の Nazi の残ぎやくである。"Jes, ili mortigis ĉ. okmilionojn, eble pli multe." とかれもいう。この頃の新聞では 600 万とあるが、それはいずれでも問題はあまい。かれはところでどうして逃れたか……。その点、われわれの今まで知らない事情があつた。



Multaj judoj, jam de longe forĵetis judan religion kaj ne vizitis sinagogn, Do oni ne povas scii, ke ili estas judodevenaj. Tiam Nazi ne arestis ilin.

シナゴゴ? はて? vortaro でみるとユダヤ教会だつた。かれの場合も jam miaj gepatroj forĵetis la religion とのこと。当然ききたくなる。

“Ĉu oni ne povas distingi per la mieno?”

“Ne, oni ne povas. Puran hebreon oni bone povas rekoni, sed ordinaran judon ne povas. Do multaj judoj povis poste vivi forĵeintaj la religion.”

なるほどそういうこともあるのか。各種民族が混り合う中部ヨーロッパ、しかも移動の激しいところでは、あちこち移っているうち sinagogo にも行かねば judo かどうか、わからなくなるということはあるようだ。つまり、多くの記録にあるユダヤ人虐殺は、宗教的に、また、ユダヤ地区居住などで、はつきり deveno のわかっている者に対して行なわれたということらしい。ただどこかれもドイツ軍内でソ連その他の捕虜虐待を批判したことが知れ、1カ月 karcero のお世話になつたとか。ともかく容易ならぬ時代ではあつたらしい。

ここで F-inoj と別れる。Ili revenas aŭ al Sapporo aŭ Tomakomai, sed ni de nun al Muroran.

東室蘭の S-ro 平田宅へ着いたのは室蘭側の予想より早かつたらしいが、やがて皆揃う。(S-roj 平田 菅原、佐藤、須藤、西、村木、F-inoj 山田、小林)

まず、地図を拡げて54年来の各国周遊のこと。アフリカ縦断のこと。南米でのこと……、そして今度の旅行のこと……。又も manstampo の話となり皆協力させられる。

かれの強調した主張は次のようだつた。「U.E.A.年鑑などに日本の地方会として出ているのは 東京、大阪、名古屋等いくつかの大都市にすぎない。国際組織への参加者が少なすぎるため、十分の国際的連けい、活動ができていない。これを解決するのは、societo が国際組織に kolektive aliĝi 以外にない。Kiu el vi estas U.E.A.-anoj?」平田氏が手をあげると、

“Ho, Ver  
にろうだ  
日本に  
oentese  
maniero  
物の名、  
からねば、  
のみが生  
rekta  
の大団  
だ。  
「65年  
間かかる。  
貨は異に  
いている  
の gee-an  
訪れて話  
をこすだ  
等々4年  
た。われ  
ると知ら  
なお、

7日午  
が札幌  
からは  
という  
初めて  
だろうか

"Ho, Vere! Vi estas ja bona escepto" との返事であつた。たしかにそうだろう。

日本に dUmil esperantistoj といつても, parolanta esp-istoj 600 (2) であろう。ほんとの esp-istoj はこれではだめ, Lern-maniero に誤りがある。母國語を使ひぬ rekta metodo あるのみである物の名, 又を一応母國語を件介として考えるのでなく直接 Esp で考える。わからねば, Kio? Kiel? ときくことができる。そこで会話が始まる。これのみが生きた Esp の学習法である。」

rekta metodo については, 異論もあろうが, 採用しつつ学習することの大切なことは全く正しい。日本人の学習にはどうもこの点が欠けているようだ。

「65年の東京大会最大の問題は何か。それは trafiko だ。船便は6週間かかる。飛行機は高い。trafiko のカギは, ソ連領内通過だ。ソ連の運賃は実に安いから。(この点は中央公論の正月号に大阪市大の小野助教がかかっている)これができれば, 時間, 経費ともに半分に短縮され3000以上の ges-anoj が東京へ向うだろう。この件については, ソ連大使館を2度訪れて話したが, 十分明るい見込みがある。そうすると全参加人員は5200をこすだろうから, 食料, 運賃が大変な問題になる。」

第44年度の世界大会へ向つての遠大な構想とその準備へと断は断つていつた。われわれのそのための laboro, kiun ni devos fari .....をいろいろと知らされ, 考えさせられた夕べであつた。

なお, 8-10 Gunkel は18日夜平田氏宅に泊, 翌日仙台へ向つた。

\*\*\* \*\*

はじめて外国の samideano に接して

7日午後5時すぎ, gvidantoから電話あり, 明8日外国の samideano が札幌から古老に行くとのことなので, 同行するようにとのこと。昨年9月からはじめて, 話すという段階にはまだ至つていないので「音なしの職業」という条件で行くことに決める。

初めて接する外 の samideano : どんな人だろうか?, 何をしている人だろうか?, そしてまた國名は?, きいたはずなのにもうすでにソワソワし

てしまつて忘れてらしい。とにかく初対面の挨拶ぐらひは言えなければと一夜づけをけじめる。しかし、覚えるどころではない。

8日朝10時30分ごろ gvidanto が誘つてくれる。そして駅への途中挨拶だけはと教えられる。

駅で gvidanto が紹介してくれた S-ro グンケルの大きな手の中に私の手がすつぽり入つてしまう。“Bonvenon!” “Bonan tagon!” S-ro グンケルの寒にあざやかな発音。もうそれでポーズとしてしまい、それ以後は条件どおり「音なしの講義」で聞くことに専念…… 半分以上もわからない言葉があるが samideano という変易さか、人間としての共通点なのか、何とか言わんとしている意味がわかるような気がする。

たまに何か尋ねてみようと思つても口から言葉がでない。度々このような機会に恵まれたならば、否応なしに語るなければならなくなるだろう。そうするためにはもつともつといろいろなことを学ばなければならないだろう。Tekstoにあつた Parolu kuraĝo! だ。そして前進したい。

時間が許すならば、そして samideano が希望するならば、やはり苦小牧にも泊つていただいて、みんなと話し合える機会が持てるならば寧ろと思う。そしてそういう日が近いことを願いつつ

(1954.4.20)

Tomokoma; Hitomi Kitabatake



### GAMEĈULOJ VOJAĜAS!

大阪府箕面(ミノオ)町の丸善石油学院に学ぶ S-ro 6-ro 江川浩典ら3名は8月初旬から中旬にかけて北海道を旅行し、各地の samideanoj と交遊の機会をもつたが、北海道を離れるに当つて次のような愉快な一文を寄せてきた。寄稿のいきさつもケツサクで、かれによると次のとおり……

「僕のこの文章は連絡船が函館を離れるときに考えていたのですが、向しるるゆれる船中で書くことができず、その上吉田線に飲まされたビールが僕の身中をかけめぐつていたものですから、とうとう下宿に書いてから書くことになつてしまいました。しかし、いざ書くとなるとどうも思うように書けず、とうとう、皆様にお会いしてホタヨイ状態になつている状態にしてから、もう一度その感激を呼びおこして書いた次才です……。」



Mi startis de Osaka en la 4-a mateno de 1' Aŭgusto kun la penso, ke la vojaĝo al Hokkaidô fariĝos por mi la unua kaj la lasta, ĉe se ni povus mondvojaĝi. Tamen alveninte al la urbo Sapporo, mi tute surprizis la belecon de la urboplaneco kaj gajecon de la loĝantoj pli ol mia supozo. Ĉar antaŭ la unua paŝo en vian landon mi supozas vin, loĝantojn en Hokkaidô malgajaj pro klimata influo de longa vintro. Sed se vi demandas al mi "Do, kia punkto estas gaja kaj afabla?", mi ne povas rekte respondi al vi. Ĉar kiel mia unua impresio mi sentis tiel. Vi

eble diros en viaj koroj "Ho! tiel la loĝantoj de Osaka estas GAMEĈAJ?" Certe kompare kun vi en Hokkaidô, Osaka-homoj ĉiam pene okupas sin en hejmo, laborejo kaj ĉe en tramo al sia laborejo. Tial en iu senco ni, loĝantoj en granda urbo estus flegma krom esp-isto(?) en hom-rilato. Busgvidistinoj en via lando ĉiam donas al la vizitantoj bonan senton. Kiam ni alparolis kaj demandis voĵon kaj nekonatajn aferojn pri Hokkaidô al diversaj homoj en la vojaĝo, ili ĉiam respondas al ni kun rideto en borkoreco. DOSANKO estus kompatema kaj kruda.

En ĉi vintro mi feliĉe renkontis kun fraŭlinoj Kitabatake kaj Moniŭa en Kameoka, kie la dua semajna kunvivado por fortigi la kapablon de 1' esperanta konversacio estis okazigita. Tiam mi sciis ilin Hokkaidô-anoj. Mi sopiradis vojaĝi al Hokkaidô de antaŭ longa tempo kaj la kondiĉo por la vojaĝo jam estis veninta al mi en la nomo de mono kaj tempo. Tial mi diris al ili, ke mi eble vojaĝos al via lando en ĉi somero. Antaŭ la vojaĝo mi ricevis de F-ino Kitabatake la libron pri Hokkaidô kaj adresojn de Hokkaidô-esp-istoj. Dank' al ili ni povis plani kaj povis renkonti telefone kaj rekte kun samideanoj ĉie en la loko. (nome en Tomakomai, Hakodate, Sapporo, Otaru kaj Asahikaŭa) Kvankam ni ne povis sufiĉe rigardi vian belan landon en duon-monato kaj plue pro malbona vetero ni ne povis viziti al Ŝakotan, Karikaĉi-monta pasjo kaj Tenninkjo, renkonti kun Sam-ide-anoj kaj gastigi en sia hejmo aldonis al mi pluan valoron. Hokkaidô estas kompreneble Japanjo. Sed ni en Kansai distrikto for de Hokkaidô

vere ne  
ajon ka  
kulturo  
de sami  
spertis  
En la  
Hjekuni  
presan  
eniro e  
ke mi k  
sintente  
ili en  
te vort  
basis e  
per mil  
verdan  
al Tom  
mi mal  
elirejo  
linoj k  
"Ĉi! B  
estis  
paŝan  
batake  
ili. A  
kun ek  
tute r  
da bie  
drinko  
ni par  
lingvo  
vin, ĉ  
kiun ĝ  
de Tom  
malgre  
logvi  
da lag  
Paris  
li, s  
planon  
ili. K  
Post  
la sta  
dis de

vere ne komprenas la moron, la dialekton, la manĝaĵon kaj la pejzaĝon. Felice mi povis ion tuŝi la kulturon de Hokkaidō aŭskultinte multajn aferojn de samideanoj en la hejmo same kiel alilandanoj spertis tion en samaniero.

En la 14-a tago de la Aŭg. post la rigardado de Hjakunin-marbordo kaj Erimo-kabo mi prenis vicekpresan vagonaron de la stacidomo de Samani. Tuj post eniro en la vagonon, mia koro ekdancis kun la ĝojo, ke mi baldaŭ vidos samideanojn, kaj malkviete sidinte sur la sidejo, mi pensis kiel alparoli al ili en la unua vido. Mi tute konfuziĝis konsultinte vortaron kaj malferminte la gazeton. Du horoj pasis en la konfuziĝo. La voĉo "Tomakomai, Tomakomai" per mikrofono fluis en miajn orelojn. Mi tuj metis verdan flagon sur mia dorsosako. "Ho! jam venis al Tomakomai." "Do, elvagoniĝu." Kun malpezaj paŝoj mi malsupren iris laŭ ŝtupoj kondukantaj al la elirejo de la stacidomo. Ho! tie atendas nin fraŭlinoj Kitabatake kaj Moniĉa kaj S-ro Kagura. "Oh! Bonvenon!" "Oh! Bonan Vesperon!" La saluto estis simpla. Tamen pro troa ĝojo ni ne povis trovi taŝgan parolon. Survoje al la hejmo de F-ino Kitabatake ni estis kondukita la konturon de la urbo de ili. Apenaŭ ni malfermis la pordon, ni estis fotita kun akbrilo de S-ro Joŝida. Post bano ni estis tute regalita kun bongustaj manĝaĵoj kaj tiam multe da biero, kiom ni ne povis konscie movi post la drinko. Kvenkas ni estis lacaj pro daŭra vojaĝo, ni paroladis reciproke en esperanto kaj japana lingvo humore kaj gaje flegesinte horon. Mi dankas vin, ĉar mi povis manĝi kaj bone gustumi la HASKAPP, kiun ĝis nun mi ne manĝis kaj kiu estas famproduktaĵo de Tomakomai. Tio estis por mi tre tre inda sperto malgraŭ malfacila manĝado por mi. Eble mi povus loĝvivi pro HASKAPP. Post la tago ni vizitis al la lago Ŝikocu kune kun la grupo de Tomakomai, kiu faris piknikon en la tago. Mi deziris kampadi kun ili, sed mi bedaŭris, ke mi ne povis ŝanĝi mian planon de la vojaĝo. Tial de la tago ni adiaŭtis kun ili. Kaj ni grimpis la pinton de Parumae-monto.

Post kelkaj tagoj mi alvenis al Hokodate. Antaŭ la stacidomo S-ro Joŝida atendis vin. Antaŭe mi atidis de iu samideano, ke S-ro Joŝida estas tre bonkora

homo. Laŭ onidiro li estas tute bônkora, kies samideanon mi povis elĉerpi el lia mieno tuj post la renkonto. Malgraŭ en laborado li sola bonvenigis nin kaj zorgis pri nia turismo, kompleze denove ekzamenante la okveturan horon de urba buso. Post la trarigardo de la urbo ni havis du horojn por adiaŭi kun la urbo. La mallongan horon li utilis kiel eble plej por ni gvidante al kvietaj loko (Jamagoja), renove aperinte antaŭ ni. Tie ni ankaŭ estis regalita kun trinko kaj ĝrinko de SAPPORO-biero. El JAMAGOJA-kafejo oni povas rigardi la kvietan urbon kaj tial ĝentilaj abekoj iom multaj vizitis al ĝi. Mi elkore dankas por tio, ke li konsciis niajn horojn junaj kaj elektis tian lokon. Mi supozis tuj antaŭ renkonto kun S-ro Joŝida, ke li estus juna samideano. Sed li estis veterano kaj kvankam li estas 56 aĝa, lia mieno estis tre tre juna. Mi diris al li "Ĉu via aĝo estas inter 45 kaj 50?" Li respondis "Ho! dankon. Mi estas 56 aĝa. Esti juna estus dank' al Esperanto."

En la 18-a kaj 10 minutoj de la 18a tago mi prenis la ŝipon ĉe Hakodate. Mi adiaŭis kun S-ro Joŝida ĉe la enirejo kun varma manpremo. Kun la adiaŭa melodio la ŝipo malfrue kaj kviete iom kaj iom malproksimiĝis. Nokta pejzaĝo de Hakodate ridetas sur nin kun saluto. Mi ĉie en Hokkaidō estis favorita. En Sapporo man zorgis S-ro Joŝihara. Koran dankon!

Mi pensis, ke vi Hokkaidō-anoj de nun devas labori kun esp-movado picepe celante al la 50-a U.K. Vi ankaŭ havas ĉagrenon kiamaniere plifortigi la movadon. Tio estas tute sama kun mia grupo. Sed ni revas ĉiam kaj por ĉiam serĉi bonan ideon por tio. Releĉe vi havas najbare belajn lokojn por pikniki. Se via grupo malvigliĝas, tiam vi havas la stuton por renove vigligi la membrojn per pikniko al la bela loko. Mi kredas, ke grupoj, kiaj la plej fortaj estas en Hokkaidō, estos Sapporo, Tomakomai, Otaru kaj Muroran. Kaj ili estas proksima iom en horo. Do, se vi havas tempon, kiel plej eble kontaktu reciproke. Tio ja estus bona incito por altigi reciproke kapablon kaj amikecon, mi kredas.

Ho! jam la urbo de Hakodate malgrandiĝas en la ŝipa fenestro. Okaze de adiaŭo mi ne akceptis zonon

(ta  
vid  
hav  
tut

達  
れ  
点  
在  
共  
に  
きた  
私  
た  
の  
は  
です  
こと  
が  
ど  
も  
き  
た  
から  
に  
内  
の  
に  
の  
遊  
行  
の  
遊  
学  
遊  
ては  
納  
分  
れ  
ま  
す。  
日  
遊

(tape, angle) sed ni havas pli fortan zonon ne videblan. Tio estas amikeco kaj samideaneco. Se vi havos ŝancon viziti al Kansai distrikto, mi ektos tute bonveniga.

Ĝis revido, karaj gesamideanoj!

Ĝis revido, Hokkaidô!

Bonan sanon, karaj geesperantistoj!

Sincere via

H. Egata

へキ地の初心者から H.E.L.に望む

道央地方には多くのエスペランティストがいて会も多くあるようですが、それ以外の地方ではゼロに近い状態だと思えます。それで、連盟は道央以外に点在する学習者に対して常に往復ハガキを用意し、道央の状況を説明すると共に地方の状況や、小さなことでも皆の意見を求め又はアンケートをとるべきだと思います。道央なら電話一本でどのような連絡もとれるでしょうが、私たちへキ地ではそれができません。力のない私たちにとつて一番うれしいのは、遠くからの便りです。私たちは道央にいる方たちのことが知りたいのです。その最良策は「レオントード」を多く発行することです。季刊というのでしたから年6回発行だと思えますが、今のところ2年に1回位ですがどうなっておりますか。何もお手伝いできなくて申し訳ありませんが、会費は諦めます。もし費用不足で発行できないのでしたら、会費を値上げすべきだと思います。年額200円は少なすぎませんか。うすいもので結構ですから、年6回位発行していただきたいと思えます。

H.O 誌の大会予告にエスペランティストの住所録を作るとなりましたが、道内の全学習者を団体、個人別を連盟加入者と未加入者に分けてレオントードにのせていただきたい。少しでも学んだごとのある人は全部のせて下さい。道内の全学習者の調査は強い忍耐と皆の協力が必要と思えますが、道央だけの連盟でなく、全道の連盟にするために、例えそれらの人が活動家でなく、語学の才能を持たないとしても、道北・東地方にも関心を持ち続けて下さい。

連盟加入者の会費未納リストを作り、名前と金額をレオントードに発表してはどうでしょうか。手荒いようですが忘れている人もあるでしょうし、未納分をへらすこともできるのではないのでしょうか。その際、期限をつけてそれまでに納めなければ連盟脱退とみなすという規定をはつきりつけるべきです。連盟の振替がしつかりしていればできることですから実行して下さい。

H.E.L.の全蔵目録、規約等ものを付けて下さい。

連盟の活動がますます盛んになることを祈ります



20年近く暮した日本の友へ記念にと紅白の梅を校庭に植え、卒業証書を手にしたまま新鶴港から祖国朝鮮人民共和国へ帰つていつた少女のはなし。材料は新聞記事からとりましたが、翻訳でなく全然自分の作文としてかいてみました。

(Tomakomai; Acuŝi, Hoŝida)

### Floru bele la amikeco!

De decembro 1959 daŭris hejmenreveno de koreoj, loĝintaj en Japanujo, al Korea Demokrata Popolrespubliko (Nord-Koreujo), rezulte de la humana klopodo de Ruĝa Kruco kaj pacamanta japana popolo. De tiam jam revenis kelkdek mil koreoj al sia patrujo. Niigata haveno ja fariĝis la ponto de amikeco inter la du popoloj.

Proksime de Niigata Gubernia Domo estas Niigata Ciuco Altlernejo, kie lernas nur lernantinoj. En la korto de ĝia biblioteko nun staras du umearboj, unu blanka, kaj la alia ruĝa, bele florantaj.

Tiuj umefloroj estas simbolo de internacia amikeco inter unu korea knabino, F-ino Kazumi Kim, kaj ŝiaj japanaj amikoj.

Ŝi estis lernantino de vespera klaso, kaj tutsole forveturis de Niigata Haveno al sia patrujo, Nord-Koreujo, tuj post la kursfina ceremonio de la lernejo.

Kun la diplomo enmane, sur la ŝipo ŝi adiaŭtis al samklasanoj akompanintaj ĝis la haveno, svingante sian brakon dum longa tempo.

La du umearbojn ŝi plantis en la antaŭa tago de la forveturo. Ŝi estis amanto de literaturo. Ĉiam ŝi legadis librojn en la biblioteko, kie ŝi ĉiam povis rigardi la korton tra la fenestro.

"Mi plej amas umeflorojn. Do ĉi arbojn mi postlasas por mia eta rememoro en Japanujo, kie mi vivadis ĉirkaŭ dudek jarojn---" estis ŝiaj lastaj vortoj.

De tiam pasis unu jaro. De ŝi venis la unua letero plena de hela espero informanta ke ŝi nun lernas en medicina kolegio en Ŝingiŝuu.

La instruistoj skribis al ŝi kolektive. Kun foto de la plenflorantaj floroj ili skribis, "Kiel ĉi floroj, ankaŭ via estonto floru bele!"

(El *Jurnalo Jomiuri*, en aprilo 1961)



◇前夜祭

「前夜祭」と銘打つたのはいささかオーバーな表現、だが適当な名がないままにこうなつてしまった。前夜(21日)苫小牧に9名が宿泊するので、その場所一国鉄オ一寮一でひとときの *Amigo Sa kunsido* をと考えた次オ夕方、現地 *gosemideanoj* (plejparte fraŭlinoj) に迎えられて、小樽、札幌、室蘭からの11人は、地元同志と共に国鉄オ一寮に入つた。驚ろいたらしい *administrantino* 「ただ9人泊るとしか聞いていないのに……あまり大勢2階に上られたら、古い建物だから危い」と心配する有様。

2階8畳間には、遠来、現地合わせて25名が入り、にぎやかな *kunsido* となつた。内訳は、小樽2名(夜おそくもう1名兼)、札幌5名、室蘭4名、苫小牧14名

*sinprezento* の後、去る年末年始の亀岡の *Disciplinado* のときの *S-ino Worcester*, *S-ro Eizo Itoo* の *parolado* を *sonbendo* でできく。*S-ro Itoo* の方はかなりききとりやすい話し方なので、*Junaj samideanoj* もある程度聞けた様子。*Disciplinado* については、参加者 *F-inoj* 北島、茂庭(苫小牧)から簡単に説明があつた。そのあと *Kanto de Y montulo* (山男の歌) の練習その他、また、歌の吹込みなど。多くの人が *kantaro* を持っていたので、たのしく歌うことができた。*kunsido* のときなど、もつと歌を活用すべきだろう。しかし、翌日の大会を控え、大会会長の打合わせ、議題の打合せ等もこの間に行なわれた。大会案内のハガキには7月10日まで大会提案を……と書いてあつたが結局ゼロ、それで各地方会の同志と話し合つた上、議題案件を整理(これはこのあと直ちにタイプを打ち、翌日の大会までに印刷)。10時30分頃解散。

◇大会

苫小牧エス会員は8時から会場(産薬会館2階ホール)準備。一部は駅前へ出迎え。

予定とおり9時受付開始、10時の開会時刻にはほとんどの席がふさがつた。

定刻よりややおくれて10時15分 *F-ino* 茂庭の "De nun ni mal-

fermas la kongreson. Unue ni kantu himnon Esperon. Bonvole ĉiuj startu.」で開幕。

ついで Saluto de preparkomitato と programo にはあるが、実は現地では Preparkomitato なるものは作つていなかった。それで F-ino 北島(菅小牧)は "Salutas reprezentante niajn anojn, ĉar ne havas preparkomitaton por la kongreso" と saluto, 更に Ni estas freŝbakitaj esp-istoj, tial vi trovos multajn malkontentajn aferojn. Ni petas vian grandanimen pardonon, kaj mi esperas, Okaze de ĉi kongreso, esp-a movado en Hokkaido disvastiĝos. と結んだ。

次いで Rekomendo de la prezidanto に入り、S-ro 相沢(札幌)が推された。

Esperante kaj japane の議長挨拶は、「今まで札幌、小樽で大会が多かつたが、今後なるべく多くの場所でやつて交流をはかりたい。」との念願をのべられた。

Sinprozentoj kaj salutoj を逆時計廻りに、昨年の大会では、初めに japane が続き、そのあとほとんど japane になつてしまつたが、今度はその逆で大半が esperante になつた。komencantoj でも、tute japane は少なく、Mi estas... 位はやつていた。いつも kunsido のときなどこうありたいものである。知つている単語をどんどん使いたれて更に前進していこう。室蘭から札幌に移られた S-ro さとう 突も久しうりに Esp-ujo に顔を出され、「これを機会にまた 에스ぺラントをやる気が起ればと思います。」と japane の挨拶。さすがに長年の Veterano の lerta kaj komprenema saluto は光つていた。

祝電披露... 在京中の S-roj 吉原、浜田(室蘭)、東京のキシモト、カモ、函館の小田島、吉田の各氏から。

☆ Raportoj de lokaj grupoj

◎ Sapporo (raportis F-in Nagata)

ピクニーコ... 1961年11月23日、定山溪へ、参加者11名

ザメンホフ祭... 1961年12月16日喫茶店ニシリンの和室で例年のごとくザメンホフをしのんだ。参加者17名。

世界理解の日……サツポロの姉妹都市であるアメリカのポートランド（オレゴン州）から1961年のもう雪もふりだしたところに、世界理解の日をポートランドとサツポロとで冬至に同時開催をしないか、とのよびかけがあつたが、こちらの時期的な都合でうやむやにしたところ、1962年になつてからまた同市の世界理解委員会(Mondvida Komitato)から、去年はポートランドだけでやつて効果があつたから今度は春分のころにぜひ両都市で同時開催をしたいとのたよりがあつた。本会でも、同委員会が、サツポロばかりでなくだんだん数をふやして世界中の都市と同様な行事をやつて相互の理解をはかろうという熱心な意図を知つて、協力するむねを返事し、録音テープを交換した。むこうからはさらに koloritaj film-oj がおくられてきた。1962年3月24日市民会館2号室で一般市民を対象に、世界理解の日(Mondvida Tago)と銘うつて、ポートランドが紹介され、ポートランドの声がながれた。もちろんポートランドの世界理解委員会というのは、その構成員がエスベランテストと世界連邦主義者であることから推してわかるように、おくれた filmoj もうたもことばも平和をつよく願ひ、しかも人々につよくうつたえているのが明白なものばかりである。さきごろ同市からサツポロと同時開催した模様をつたえてきて、本会のおくつたこえのたより(迷曲が4つおりこまれてある)が聴衆に感銘をあたえ、それが要因となつてか、世界理解委員会会長の James W. Deer さんはその直後テレビにだされ、そのためにワシントン市から反響があつたそうである。この両都市の同時開催の行事は聴衆がいずれも数10人にすぎなかつたが、平和のための小さな努力の才1歩としては成功であつたとみえて、つぎに中国に対してこの夏至の世界理解の日に参加するよう呼びかけることになつた。それがすめばソ連にもよびかけよう、というのがポートランドの意向である。中国からは返事があつたが、国連加盟も実現されない現状で世界理解の実現はどうかとの懐疑的なものだつたが、真意は通じたとみえ資料を送つてきた。世界理解の日として冬至、夏至、春分、秋分をえらぶのは、それが天文学的に世界共通だからである。本会としてもこういつたことには協力をおしまないつもりである。

オ3回総会……1962年度本会総会を4月14日労農会館4号室でひらいた。出席者15名(会員数75名)

木陰会……年末年始以外は数年来流している。誰か新しい人が来て誰かが去る。平均して10人前後の出席。去っていく人がいることについては反省の余地があるが、勉強にふさわしい会場のつくりと、きまつた講師がそろえば毎木陰来る人もどんどんふえることは間違いない。今は吉原会長の法律事務所を使用しており、部屋が半分に仕切られているので、一方で毎回みえる祈らしい人のための講習、他方でそのときそるとき入るエス文(手紙や雑誌)をもとに会員の自発的な共同学習が続けられている。

世界救世教では、教主からエスペラントをやれとの指令が出て信者がやることになり指導にいつたが、いろいろな階層の人々が一緒にまじっているので、あまりよい結果にならなかつた。救世教の道大会に集まつた幹部にもエスペラントについて話しをした。

元札幌エス会員平野長克氏が始めたヒラノエスペラント学習院とは、札幌エス会は無関係である。

◎ Otaru (S-ro T. Takahasi)

小樽には毎年 gasto が何人か来ていたが、ここ1年はなく大きな propagando もせず低調な1年だつた。講習は今年5月から始め今は8人位来ている。なお、1965年の東京大会には5人は参加するつもりであるが、金が問題、それで先にそのための積立てを提案したが、小樽では実施してかなり積立てている。

なお、ここで東京UE(世界大会)の準備委員会に出られたS-ro 江口の報告があつた。

◎ Hakodate 出席者なく報告なし。

◎ Muroran (S-ro Hirata)

時に報告すべき事項はないが、2つの中学でクラブ活動にエスペラントをやっているので指導している。

◎ Juni (S-ro Nitta)

Nia movado tuto dormas. Mi ĉiam babilas kun s-roj Izumiya, Kodama kaj Takeda reorganizi nian movadon. Se ni povos inviti Hokkaidō Kongreson en Iŝamizaua, tiam multaj ges-anoj kolektiĝu kaj interbabilu, mi esperas.

◎ Tomakomai (S-ro A. Hoŝida)

Ekde la 15a de septembro 1960 ni havis elementan kurson ĉiuŝafide en 東部集会所. Tie gvidis S-ro Hoŝida dekkelkajn kursanojn. Fine de la 1960 la kurso elementa finiĝis, kaj la duagrada per Teksto Dua ni komencis en januaro 1961. La 13an de aprilo 1961 ni fondis Tomokomai - Esp - Societon kaj tuj aliĝis al H, E, L.

De antaŭ unu jaro ĉiam ni havas du kursojn ĉiusemajne, elementan kaj dugradan. La elementa kurso ekde la 19a de majo 1961, finiĝis la 26an de oktobro, kaj la novebakitaj esp-istoj aliĝis la dugradan kurson, kie ni kunlegis "Karlo"-n.

Ekde la 8a de februaro 1962 ni komencis elementan kurson kun 6 anoj kaj finiĝis la 26an de majo.

Vespere de la 27a de aprilo ni havis ĝeneralan kunvidon, tie dekunu partoprenantoj diskutis pri la preparado por ĉi tiu kongreso.

Ekde la 31a de majo ni komencis la elementan kurson, kiu ankoraŭ nun daŭras. Ĝin partoprenas ĉ. 3 komencantoj.

Multaj el ni jam korespondas kun alilandanoj, kiuj afable sendis al ni leterojn, belajn bildkartojn, gazetojn, pupojn, ktp. Ilin ni utiligis por nia ekspozicio, kiu nun havas lokon en Curumaru ĉiovendejo (鶴丸百貨店) en ĉi tiu urbo.

#### ☆ Diskuto pri エスペラント学習院

札幌で元札幌エス会員S-ro 平野長克が始めたエスペラント学習院について、何らかの対策が必要でないかとの声が出た。その宣伝の仕方、入学金、受講料が高いこと等について疑念が出された。現在のところ札幌エス会としては協力せず無関係の態度。講師として宣伝文に名をのせられた連盟員の方々も現在協力していない状態である。結局「特に必要となれば措置をとるが、現在のところ態度表明はしない」ということになった。

12時すぎたので、記念写真さつ影、昼食。昼食中、昨夜録音した歌のテープなどをかけた。

13時再開、Propozoj kaj diskutado に入る。

(1) Disciplinado por parolkapablo en Hokkaidō (Muroran)

提案説明は室蘭のS-ro 村木、趣旨については賛成された。やり方、場所、時期について若干意見も出たが、次の提案 Junulara Organizaĵo の活動として期限をきらず宿題とすることと決定。

(2) Fondo de Junulara Organizaĵo

この問題は昨年の全国大会の Junulara Fakunsido で討議され、'62年の大会で結成を目標に、各地方での組織結成、活動の準備期間を1年おくこととしている。昨年全国大会での ALVOKO を全員に配布、提案説明は室蘭のS-ro 村木

大会としてこの件に賛成、結成する。設立委員として Junuloj の多い各地方会から代表を出すととした。委員は、次のとおり。

|                 |                |
|-----------------|----------------|
| 室蘭 S-ro 村木 昭徳   | 苫小牧 S-ro 影浦 英明 |
| 札幌 S-ro ゴト-ヨシハル | 小樽 S-ro 佐藤不二雄  |

(3) H. E. L. 役員改選について

連盟活動の停滞、Leontodo の neapero につき S-ro 高橋から Pard-onpeto あり、Ligo の組織の重要性について議長の S-ro 相沢から過去の歴史から説明あり、結局

|      |      |    |          |
|------|------|----|----------|
| 委員長  | S-ro | 山賀 | 勇 (小樽)   |
| 副委員長 | "    | 吉原 | 正八郎 (札幌) |
| 事務局長 | "    | 高橋 | 達治 (小樽)  |

とし、事務局を小樽に移すことに決定。

(4) Pri Leontodo (Tomakomai)

この議題は Leontodo が昨年中1度も発行されなかつたことから Tomakomaianoj が準備したものであつた。趣旨は「Ligo オーの活動であるべき機関誌発行がなくては Ligo はないに等しい。この現状打開の手を打て」ということだつたが、役員改選問題等の中でこの点はかなり討議されたので特にこの議題による討議は必要なくなつた。新たに連盟事務局となる小樽と話し合つた結果、この大会号は苫小牧で出し、その次からは小樽で出し、年4回発行を実行することとなつた。

(5) Pri venonta kongresejo

Otaru に決定

これで全職を終了。議長から「今までとかくみられた偉大な目標をかかげた議題はなかつたが、ひとつひとつ具体的な結論が出され、今までにない有意義な大会だった。」と挨拶。ついでTeaingの斉唱で閉会した。

直ちに待機していた市営バスで世界の注目をあびて着々工事が進められている苫小牧工業港築設現場を見学、更に王子製紙苫小牧工場へ……ここで飾らくanojの案内で、日産1000トンを誇るこの工場を見学。その後しばしの時間を工場正門前の芝生でのbabilladoですごし、再会を約して次々と去っていった。

～楽～楽～楽～楽～楽～楽～

### オ 26回北海道 エスペラント大会会計報告

#### 取 入

|     |         |                                                                     |
|-----|---------|---------------------------------------------------------------------|
| 参加費 | 5,900円  | 59人×100円                                                            |
| 出席費 | 6,600   | 44人×150円                                                            |
| 写真代 | 5,100   |                                                                     |
| 寄附金 | 3,800   | 吉田栄 2,700円、高橋要一 300円<br>伊藤誠致 100円、高橋斗星 100円<br>岡本義雄 100円、小柳エス会 500円 |
| 計   | 21,400円 |                                                                     |

#### 支 出

|        |         |                                          |
|--------|---------|------------------------------------------|
| 借料及び損料 | 4,070円  | 会場借上費 900円、バス借上費 2,100円<br>白布洗たく代 1,070円 |
| 食糧費    | 7,120   | 昼食 5,000円、菓子 2,000円、お茶 120円              |
| 通信費    | 1,620   | 往復ハガキ 1,530円、郵便料 90円                     |
| 印刷費    | 580     | 大封筒 300円、模造紙 30円、<br>プログラム用紙 250円        |
| 写真代    | 3,570   |                                          |
| その他    | 557     | 徽章 350円、生花 200円、色紙 7円                    |
| 計      | 17,517円 |                                          |
| 差引き残   | 3,883円  | 次期大会へ繰越し                                 |



(・印は不在参加者)

|          |                      |
|----------|----------------------|
| ・吉原 正八郎  | 札幌市南1条西12丁目          |
| 相沢 治雄    | " 菊水東町7              |
| 高橋 襄一    | " 豊平5条9 道営住宅         |
| 木村 喜壬治   | " 大通東8丁目             |
| ゴトー ヨシハル | " 白石本通791の9          |
| 佐藤 実     | " 南29条西9丁目 郵政アパート443 |
| ・東 三郎    | " 琴似町宮の森862          |
| 山崎 久蔵    | " 北26条西8丁目           |
| 荒井 玲子    | " 旭ヶ丘1894            |
| 永田 明子    | " 北16条西5丁目 日高方       |
| 松本 華子    | " 月寒西1条4丁目           |
| ・山賀 勇治   | 小樽市花園町               |
| 高橋 逸治    | " 桜町307              |
| 江口 音吉    | " 奥沢町4の22            |
| 早川 昇     | " 緑町2丁目2             |
| 佐藤 不二雄   | " 南赤岩町25             |
| ・吉田 栄    | 函館市船見町43             |
| ・藤原 信吉   | " 港町鉄道敷地 鉄道宿舍143号の2  |
| ・井上 久    | " 松蔭町7               |
| ・小田島 栄   | 上磯郡上磯町久根別7           |
| ・武田 二郎   | 岩見沢市春日町              |
| 児玉 広夫    | " 5条西7丁目             |
| 新田 為男    | 夕張郡由仁町字三川            |
| 林 里栄子    | " "                  |
| 平田 岩雄    | 室蘭市東町東環293           |
| 須藤 昭三    | " 東町356 国鉄宿舍         |
| 村木 昭徳    | " 水元町1               |
| 酒井 幸枝    | " 輪西町286             |
| 山田 つゆ    | " 母恋南町32             |

|        |                     |
|--------|---------------------|
| 小林陽子   | 室蘭市知利別町 269         |
| 菅原鉄雄   | " 東町                |
| 由良悦子   | 夕張郡長沼町              |
| 岡本毅雄   | 滝川市一の坂町 77          |
| 伊藤誠致   | 北見市寿町 27            |
| 高橋斗星   | 岩内郡共和村大字前田 11       |
| カモセツコ  | 東京都世田谷区北沢 5-878 横山方 |
| 塩谷丹    | 勇払郡穂別町字穂別           |
| 加藤道子   | " 厚真町新町 公住          |
| 青木スミ   | " "                 |
| 星田淳    | 苫小牧市表町 18 王子北星寮     |
| 梅木孝昭   | " 王子社宅山手 4区 35号     |
| 末沢邦夫   | " " " 3区 75号        |
| 影浦英明   | " " " 5区 6号         |
| 山本英夫   | " 元町 146            |
| 葛西爽    | " 汐見町 94            |
| 北嶋瞳    | " 東町 1              |
| 津島幸子   | " 中野 89             |
| 北川美枝子  | " 勇払 30             |
| 越野文子   | " 木場町 3             |
| 大沢容子   | " 勇払 国策若葉寮          |
| 佐藤仁本   | " 矢代町 18の2          |
| 堀雅子    | " 末広町 10            |
| 北嶋千寿   | " 東町 1              |
| 持木福子   | " 王子社宅東部 4区 95号     |
| 渡辺美智子  | " 王子町 23            |
| 佐々木久美子 | " 緑町 119            |
| 三橋としえ  | " 網町                |
| 茂庭泰子   | 勇払郡早來町遠浅            |
| 牧有子    | " " "               |

## 北海道大会を主催して

Tomakomai; Hitomi, Kitabatake

昨年の大会で26回大会の開催地をひきうけてほしいと要請されていたが、私個人の考えでは、会が発足してまだ日が浅く、会の基礎も固まっていないときに大会開催という大任をひきうけてはたして十分に準備ができるだろうか、かえつてマイナスの面が出てきはしないだろうかという懸念が多かつた。それにもまして、昨年初めて大会に参加し、その後あまり進歩していない自分自身のことを考えると、何よりも「おそれ」の方が先にたつ始末であつた。そんなことから開催地をひきうけたくないという気持の方が強かつたが、返答しなければならぬ時期はとうに過ぎており、他の多くの会員は、この際宣伝のためにもひきうけた方が良いだろうという意見が強かつたこと、また、年末年始の亀岡での合宿に参加して、Esperanta Movadoのために、ほんとうにささやかな力でも尽さなければならないことを強く感じたことから、やつと、それではという気持になつた。そして3月27日の初総会の時にそれぞれの分担を決めて、いよいよ本腰を入れて準備に取りかかることにした。しかし、大会参加1度という私、或は1度も参加したことのないほとんどの会員では、何をどのように準備すべきかということがさつぱり見当がつかない。幸い戦場での会議等にはよく出されているので、適当ではないと考へたが、それに添つて準備することにした。それから3ヵ月、すこし大げさな表現かも知れないが、大会のことで頭の中が一杯であつた。といつても、1週間前までは何一つ準備できていなかったが、会員の協力の結果、ともかく形だけは何とか整い大会を迎えたわけである。細心の注意を払つたつもりでいたけれども、何かしら忘れたことがあるような不安感を拭うことができないで……

当日の大会運営の方法にしても然り、司会、準備委員の挨拶もわれわれがしなければならぬと気がついたのが金曜日、誰がやるかということもなかなか決まらず、まさか gvidanto ひとりに任せておくわけもゆかず、土曜日の夕方になつて、私と F-ino Moniŭa でそのどちらかを分担することにした。日本語でさえもやつたことがない大会の挨拶を、まだまだ不十分の 에스ペラントでやることは大会の準備以上の大任であつて、あとでテープに入つ

た自分の声をきき間違いだらけを発見して身の縮む思いであり不勉強さを今更ながら恥じた。

ともかく、このようにいろいろの、初めての経験をして準備した大会に多くの *gesamideoj* が参加して下さり、行き届かない準備に対しても寛大な態度を示して下さったことは、初めて大会を主催した者にとっては最大の喜びであつた。反面、このような大会をひき受けるためには、まず自分の力を養ふ、また会の意義が十分固まつていて、会員相互の意志の疎通がなされて麗らかな気持でなければならぬという当然のことをあらためて教えられた。同時に、この大会の準備中に感じたことであるが、会員の中に 에스プラントの持つ理想・意義などについて少しでも理解を持つている者は何人いるのだろうか。読み、書き、会話は勿論必要なことであるけれども、やはり、エスプラントの持つ理想などについても学ぶ必要があるだろうということも強く考えさせられた。そうすることによつて、会の運営も、会員の意志の疎通ももつと容易であらうし、大会の準備ももつとスムーズにできたであらうと思つた。

参加して下さった方々には、いろいろと不満もあつたことと思いますが、私どもが *freŝbakitaj Esperantistoj* であるということに免じてお許しがいただけたことと勝手に想像しているが、いつまでもこのような甘えた気持でなしに、またいつの日にか開催地をひきうけるときには、もつともつと *zorgema* な気持でやるつもりである。

大過なく大会を終えることができたことに対して、参加者の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

✻ ✻ ✻ ✻ ✻ ✻ ✻

IMPRESO

de

La 26a Kongreso de Hokkaido Esp-istoj

才 26 回北海道 에스プラント大会は、私が 에스プラントを始めてから、他の地方の 에스プランチストと交流する最初の機会であつた。しかし、私にはまだ 에스プラントを話したり聞いたりする能力がとても低く、そのために起る不安は、その他の期待や喜びよりも更に大きなものであつた。しかし、と

にかくそうした心境のまま（特に全話や文法に専念するでもなく）私はその当日を迎えてしまつたのである。

31日の夕方、地方からの人々の宿舎である国鉄オ一寮でその前夜祭が催されたのであるが、それは一応の自己紹介とエスペラントの歌を歌つたり、録音テープによるものを聞いたりして時を過ごすに留まり、前夜祭とするには少し寂しかつたが、それなりに自由な雰囲気があつて、別な意味では良かったと思う。その夜は私に誘ひがあつて、ひとあし先に荷を出なければならなかつたが、どんよりくもつた空が気持りであつた。

翌日は幸いに、前夜の心配をよそに晴れ上り、私が会場である産業会館へ行つたのは8時35分であつたと思う。すでに私のグループの人々はその会協作りに急がしうであつたが、初めての私にはその要領がとんとのみこめない、結局先試聴席にまかせる形となつてしまつた。

さて10時、開会された時間である。ラ・エスペーロを歌い、相沢さんを議長につきつぎにプログラム通り進められ、いよいよ Sinpresentoj kaj salutoj の段となる。告白するこの日私が最も緊張した瞬間である。なぜなら、私の前に挨拶するすべての人が、きれいなエスペラントで話したからである。そこで私もやむなく "Mi estas ……" と言つたのであるが、再度それ以上をここに記すのは忍びないのでやめにする。

次に各地の活動状況報告、提案、討論などが行なわれたが、總体的にその内容がどことなくくすんでいて、目新しく感じさせるものがなく、26回も続いた伝統のいわばそればコケのようなものか……と考えさせられましたが、もつと新しい、生々とした意欲を燃やして話し合つてもよかつたのではなからうか。かつてはエスペラント会館の建設についてさえも話し合つたと聞くが……。 (とはいへ、そこでは私自身ひつそりと物いわぬ立場になつていたが……)。とにかくその意味で、Junulara Organizo の発表は特に目をみはつた……という程ではなくても驚き深かつたと思う。私も一応苦小牧からその連絡係にまつり上げられたかつこうで推されたがなんとかどれを尻すばみにさせないよう努めたい。

午後2時から（実際は少しおそくなつたようであつた）バスに乗つて苦小牧港海砂の真奈現場と王子製紙を参観した。ここの感想はひと口にいつて天気がよくて何よりだつた、と言うことになりそうだが、私にとつて

他の地方のエスペランティストも、私の良い仲間だとより明確に感じさせてくれたのはこのときであつた。

以上があらまし私の北海道大会初参加についての感想（感想になるかどうか大いに疑わしてが）、とにかくそのつもりである。

何よりも、あのように熱心なエスペランティストが、ああして大勢集うということは、実はそれ自体に重要な意味があるのだ、としみじみ感じさせられたということをあえて私はここに付け加えておきたい。（1962, 7, 29）

苫小牧エス会 影浦英明



はじめて ESP-A EKSPOZICIETO を開催して

Tomakomai; Hitomi, Kitabatake

展示会を開催して、エスペラントを正しく理解してもらう必要があるとずいぶん前から考えていた。それが、今年の26回大会の開催地をひき受けることでもあるので、できればそれに合わせて展示会をやつてみたいと話し合いそのための資料は各自がそれぞれ集めようと話し合つたのは、たしか1月末であつたように記憶している。それから早速、外国の友人に援助方を書き送つたところ、すぐに何か役に立つものを送りましようとする返事が来て、6月末には、私の手許にだけでも、人形4、数多くのエハガキ、エスペラントの本、観光、旅行案内、めずらしい復活祭の卵などが集まつた。その rekompenco として日本人形、コケシなどを送つた。その費用も相当になつたが、またの機会に援助してもらわなければならないと考える。なかには、日本にあるもので一番ほしいものはトランジスタラジオであると書いて来られたのにはさすがの私も困りはてた。トランジスタラジオの宣伝が世界中に行き届いていることは喜ぶべきことだろうが、それが日本でならば手軽に安く手に入

れることができるという印象と結びついていることは素直に喜ぶことができないし、私の salajro ではとうていその希望をかなえることができない。せめて伝え聞く輸出価格位ならば何とかなるであろうが……。

とにかくあとは会場を決めるだけ、財力のある会ならばすぐに会の都合のよいときに会場を得ることができるのだろうが、会費さえも滞り勝ちな会ではとうてい適わぬ夢のようなものである。そんな中で、やつと市内丸デパートの厚意で7月18日から23日まで1週間会場を借りることができた。当初希望したように広い場所は望めず1階から2階への階段のおどり場で無料というわが会には耳よりの話して……。狭いといつてはいられず、早速下見聞の後、効果的な方法を考えることにして、ひとまず会員の持つているものを集めて検討することにしたけれども開催2週間前ということではそれも思うに達せず、集まった分だけを整理したが短い期間とお互に職を持つ身故ほとんど準備らしいものができずにしまった。もし、何も資料を提供しない会員が手助けしてくれたならばもつと良くできただろうと思う。いずれにしても、ぶつつけ本番でいろいろ不満もあつたが、ともかくも開催の運びになつた。期間中の宣伝用にと「エスペラントのしおり」を200枚余タイプ印刷、毎日4・50枚会場に置いたところ、どれ程読まれているかは疑問であつたが200枚はみごとに消化、切手紛失というおまけまでついて……。

今回ははじめての試みでもあり、会場の関係もあつて、視覚による宣伝方法をとつたわけであるが、その効果はあつたものと思ふ。今までエスペラントという言葉もきいたことのない者の方が多かつたと思われるところに、各新聞でとりあげ、また、丸デパートの宣伝ビラの中にもエスペラント展示会開催中という文字も入つていたので……。次の初等講習にどれ程の反響があるかたのしみもあり、おそれもあるが……。そしてたぶん、文化の日を中心に行なわれる市民文化祭には、公民館の社会教育団体として名を連ねているかがエスペラント会にも展示場の割り当てがあるだろう。そうすれば今度はもうすこし学問的な方向で、より効果的な展示会ができるだろうと思ふ。

御無沙汰いたしました。

皆様お元気のことと思います。出発に際しましては、いろいろご厚意をいただき心から感謝いたしました。さて、私、9月7日夜9時半ノースウエスト航空で羽田を発ち、途中アラスカに降り、次いでシアトルに降りました。シアトルでは、アメリカ教育委員会の方が迎えてくれ、また、民間人のジョーンストンという方が日本からの留学生が来ると云うことを聞いたので、と云つて迎えて下さいました。そこのお宅で6時間あまり楽しい時間を過ごし、サンフランシスコに9月7日夜11時50分到着。飛行機が太陽に向つて飛んだため、羽田を発つて日本時間の午前10時にはもう夜が明け、サンフランシスコ迄の僅か正味12時間のうちに夜食、昼食、夜食、と次から次へと4回も食事が出ました。羽田では由良さんにお見送りいただききましたので、由良さんご存知の事と思いますが、若い学生の一団は日本人だと思つておりましたところ中国人で、日本人の留学生は私一人という心ぼそい旅でした。そんなことで(また、外国の飛行機のためスタッフも外人)出された食事を皆のまねをして全部食べましたので、この12時間のうちに洋食のにおいをかぐだけで胸が悪くなつてしまいました。飛行機が遅れたため、サンフランシスコでは迎えの人が帰つてしまつており、そこでデンワをかける、次の飛行機の予約確認等てんでこまいでした。バス、次いでタクシーをひろい、10年来文通しているタビア家にやつとのことでたどりつきました。ご主人25才、奥さん(文通相手)24才、子供3人の家族で、私のために降り合わせの大きな家一軒を借り切つておいてくれ、食事の時は呼んでくれると云う欲待ぶり、毎回変つた料理をつくつてくれ、これも味を見て欲しい、あれも……と美食せめてした。日中は奥さんが或いはご主人が、車でサンフランシスコの街を見せてくれました。日本からのお客さんだと云つて学校、親せき、教会の人々等に紹介してくれ、ご主人のお父さんの誕生パーティーに呼んでくれるなど、そこでギターを弾きました。沢山御土産をもらつて、4日目の夜、サンフランシスコを離れ、ボルチモアに(日本人留学生1人が同行)、次いでワシントン、ローレイ、ダーハムに到着、迎えの人の車でチャペルヒルに来ました。11日の正午、リングウォルト家で昼食、夜は教授の



寮で晩さん。12日には外人対象の英語の試験がノースカロライナ大学でありました。外人は30人位、幸いAでパスしましたが、こちらに来て英語には突然苦労しました。他の外人は0であつても（読み書きが出来ず、文法も知らなくても）話したり、聞いたり出来るのですから驚きです。ノースカロライナは南部なのでゆつくり話すと聞いていましたが、このチャペルヒルは人口2万弱、大学生8千の大学町の為、かなり早口です。日本に居る外人はそれに比べて実にゆつくり解りやすく話します。辭義が15日から始まりました。英語が弱いたので数字を多くつかう辭義を3つとりました。やはり一番数学がわかり良く、次いで心理測定法（心理数学）もう一つの辭義は早口の先生で専ら勘を働かせて聞いています。自分なりに解釈するので質問の出ようもなく活潑な討論をボカンとして聞いています。それでも一昨日、初めて質問し、実にそう快な気分を味わいました。辭義は週、全部で7時間、月水金は午前8時から、あとの大部分の時間は心理測定研究所での勤めです。助手の仕事として云われたのは、まず研究所の研究に関する文献を読むこと、教授モデルを作るために必要なペイズ達の数学に関する700頁餘りの本を読む（よりやく半分までよみました）順音発生の装置の組立て等です。

大学院の辭義の方も毎時間20~30頁の宿題が出ますので、助手を兼任している私は、外人学生にとってはかなりの重荷です。助手の仕事は12日から始めています。シアトル、サンフランシスコですでにアメリカ人の風流にふれることが出来ました。この大学の学生、教授、街の人々も実に友好的です。朝、学生（男、女を問わず）に会えば、モーニング、ハイ、ハロー、等々笑顔で挨拶をかわし、食事をしている時も、「候は……というもので、お会い出来て嬉しいです。」という具合に、男であれば握手をし、女子学生であれば握手はさしひかえているゆる話し合ひという調子です。もう、相当の人の名前を聞いたのですが、いかにながら次から次に忘れてしまいます。男の場合はかまいませんが、女の人が自動車の中から愛さようをふりまいてくることが、しばしばありますので、ボサボサして、それに応えなかつたら失礼してしまいますので、常に緊張しています。名前は、姓でなく、名で男女をとわず呼びあいますが、私の場合は特別で呼び方も、シズヒコ、シズヒト、チエコ、ニジ、ニシサト等々、先日、アンドレアという女子学生がニシサトサンと呼んでくれた時には、実に思いがけず、嬉しい思いがしました。

た。先日の身体検査で、小児マヒ、破傷風、種とりの注射をされて、3ドルとられました。こちらの床屋はさつとかるので先週の土曜に行つて一週間後の今日また行きました。かるだけで、1ドル50セント（これでも一番安い床屋です。）、ノートを2冊かつて、1冊62セント、もう1冊は1ドル、やはり1ドル100円と考えるのが妥当でしょう。食事はアメリカの中でもこの大学が一番安いのだそうです。1回30~80セント、毎回バナナ、パイナップル等が食べられます。食費1カ月50~70ドル、授業料17ドル寮費17ドルで、研究所の給料225ドルですので、はじめ給料が少ない（パートタイムです）と思つていましたが、これだけあれば充分です。外国で勉強する場合、初めのうちは語学で相当苦勞するものと考えておくべきようです。

私の部屋（研究所でも、寮でも）のそばに電話があり、とりついでやつたりしますので、電話には慣れました。こちらについて、2週間、まわりは英語ばかり、今ではあまり聞き直す事なく、話が出来るようになりました。あと1~2カ月のしんぼりです。食事にもなれました。トイレにもなれました。ではいづれまた さようなら

(9/6/ 9.23)

皆様お変わりありませんか。先日永田さん、由良さんから札幌エス会の近況をうかがいまして、世界は正に進みつゝあるという感じがいたしました。また祭から送ってくる道新に札幌エス会例会の告示を見て懐しんでいます。

こちらの生活、まだときどき変わったものを食べたときには加減がわからずすぐ空腹になつたり、或いは、満腹で仕事が手につかなかつたりということがあります。満腹にきく消化剤は「わかもと」でなく、日本語で手紙を書いたり、日本語の新聞を読んだりすることです。現任、明後日に試験を控えて忙しいのですが、今晚食べた fish cake (fisho--kuko) がこたえたらしく、どうも英語の本を讀んでも気が散るという次第で、この手紙を書くことに相成りました。ご勘弁下さい。英語の個人指導を受けていましたのも、アメリカ英語に発音を矯正され、先日テストを受けめでたく終了しました。20時間で40ドルの投資、僕の中古車なら2台といつところ、授業の方では実際

装置の説明となるととんと解らず弱ります。今ぞの方で鳩の訓練実験（僕には興味の無いことですが）をしています、自信の無いときは駄目なもので、僕の鳩は頭が悪くて参つてしまいました。皆のやつたのとは大部結果がとびはなれているという始末、機械の操作が間違つたかなあという不要なことにまで気をまわします。頭が悪いと云えば、それは僕のことでもありますのであまり人（鳩）の事は云えません。先日、とうとう寮の部屋のランマがとわられて胴から腕にかけて皮をすりむくというちよつとしたけがをしました。鏡は絶対にかうのだから離してはいけないということを、この男は仲々学習いたしません。ランマからのちん入は三度目の事でした。鏡を自分でかけなくても自然に鏡がかかつて外からはあけられないというのがこちらのドアであります。（11月13日）

11月4日5日のウィークエンドには、このチャペルヒルから50マイル離れたグリーンスポローに住む永田さんの文通相手スコットさんの家に行つて来ました。日本人の実物を見たのは初めてとの事で、すっかり歓待されてしまいました。親切この上ないスコット夫妻、半分大人になつたと云うかピンポンをしてもお嬢様らしくしとやかにという長女の中学3年生ローレンさん、仲々元気でお姉さんもやりこめるという次女の中学2年生のマリアンさん、その下に遊び盛りの小学生男の子供が2人（ペリー君と何んとか君、外人の名前は忘れやすく困ります。）時々マリアンさんの笛で召集されます。それに奥さんのご両親や親せきの人等も来てアレコレと難しい話、食事の時の話題（日曜の星）は宗教がどれ程科学的たり得るかとか、人間の行動がどれだけ科学的にとらえ得るかとか云うような事で、僕が意見を求められるという始末。この様な話題は自分に大いに関係が深いので通常人の話題にはまずこのようなものを選ぶことは致しませんが、この時だけは遠慮なく話が出来ました。永田さんの妹さんが書いた上手な（お世辞ではありません）看字を見せてくれましたが、そのあとでどんな意味か訳して欲しいとのこと。難しい漢字のこととて、手におえず半分訳してお許しを乞いました。惜ない次女です。グリーンスポローでの一夜、毛布を一枚かぶつて寝ましたが少々寒気がします。あけがた目をさまして気がついたところ、自分が上にかぶるべきシーツの上に寝ていた事に気が付き、その下にもぐつて黙り直し、8時頃目をさますと更に自分が上にかぶるべき毛布の上に寝ていたことに気がつき、

その下にもぐつて約30分暖りました。というこれはテヤベルヒルの日本人の間で云う「西里君らしい」オツチヨコチヨイです。母の心配通りを正に実行している情けない有様、それでも生活は結構楽しいのですからとやかく云うことはありません。講義も最近は大して緊張して聞く事もなく、耳に入ってくるだけ(当たり前です)ノートするという調子。近く実験開始の予定です。元気で居ります。

末筆ながら皆様の健康をお祈りして

(夜はまだ窓をあけはなして勉強するというあたりかです)

(1961. 11)

Shizuhiko Nishisato  
Psychmetric Laboratory  
UNC, Chapel Hill, N.C., U.S.A.

## *Esperanto tra la Mondo*

### Koncertoj en Esperanto

-Nuntena Bulgario-

ロストフ(ソ連)エスペラント会 "Amikeco" には koncerta Esperanto-Grupo があり、昨年中に7回の koncerto を開いた。その最後のは Zamenhof 祭だつた。この Grupo では、世界各地と koncertoprogramo の録音テープ交換を希望している。Adreso は

U.S.S.R. Rostov, Don 6, Socialisticeskaja 169 (novij Na 14)  
Viktor Gruško

☆☆☆☆☆☆

Tago de instruisto (教員の日にあつてポーランド教師の saluto)

-Nuntena Bulgario-

Intimataj geinstruistoj kaj inĝenieroj!

En nia mezlernejo, kune kun la lernantoj kaj ties gepatroj, ni solenis la Mondan Tagon de la Instruistoj.

Inter la agrablaj momentoj kaj edikaj paroloj ni salutis la instruistojn de ĉiuj landoj. Estas nia espero, ke dum la kuranta lerneja jaro ni povos saluti vin perlitere kaj intersangi esperantajn, sociajn kaj profesiajn spertojn. Ni afable vin petas skribi al ni !

Minista Teknikumo en Krakovo,  
str. Rzesznicza 4, Pollando

☆☆☆☆☆☆

Esperantistino sur hungara poŝtmarko

-Nuntenpa Bulgario-

Okaze de la Internacia Virintago (国際婦人デー) la hungara posto eldonis du poŝtmarkojn kun virinmovadaĵaj pioniroj. Sur unu estas Klara Zetleri germana batalintino, sur la alia - Koto Haman, hungara laboristmonda laborista movado. Sia monumento staras ĉe la okcidenta stacidomo en Budapeŝto, sian nomon portas kelkaj institutoj, pionirhejmo (ピオニール少年団の家) ktp.

☆☆☆☆☆☆

Esperanto en Medicina Scienco (医学とEsp)

1960年7月に行なわれたブルガリア Esp 大会の医学分科会では「エスペラントは「科学の用語」となるべきだ」という点で一致した。すでに科学の分野では、使われる国語がだんだん多くなり、以前はいくつかの「大國」の言葉にすぎなかつたのに、非常に面倒な状態になっている。数年前22人の中国の科学者は、世界の科学者に対しよびかけた。「いわゆる大國のコトバを科学で使うことをやめよう。科学のためにはただエスペラントだけを使うことにしようではないか……」この点について、分科会に集まつた多くの医師、薬剤師、看護婦等関係者は次の結論に達した。

- (1) ブルガリアと他の國の Esp-istoj医学関係者の交流のため文献交換、交換招待などを行なう。
- (2) 外國人にブルガリアでの科学の成果を知らせるため、医学書にエスペラントの要約をつけさせ、また、エスペラントと文の論文記事を多くする。ブルガリアの medicinistoj - esperantistoj は全世界の仲間に、共



うなれば昔のことをしのび学会を通じて皆様の動静をきかせていただいている次才です。……10年振り位でこんな文を書きました。

Kun kora saluto al la kongreso. Tute via J. K.

(S-ro 沼田芳蔵；銚路市新栄町11の11)

☆ 北海道大会は大変盛況だつたようですね。おめでとうございます。……私は23才自衛隊員、出身は千葉市です。根室で静岡出身で同じ学会会員の池田隆一君について習いはじめました。もう2年くらい前ですが……現在でもまだ作文も思うようにならず、文通だけを細々とやっています。件間でも多勢いれがまた気分が変つてよいと思ひ今さがしています。1人ではどうも気がすすみません……。これからできるかぎり Espの本を読みたいと思つておりますが、何しろ金のかかることですから当分 R. O. 誌でがまんしたいと思つています。これからも勉強を続けたいと思つています。

(S-ro 植木国勝；根室局私信箱才3号)

☆ 大会の魂は札幌に不在です。四国で勤労者医療協会大会があり、そのあと各地をまわりますので悪しからず。参加者の皆さんによりしくお伝え下さい。Espだけは忘れていません。中国の El popola Ĉinioだけははとつてひまなときにひつくり返して読んでいます。

(S-ro 当摩憲三；札幌市月寒東2条2丁目)

☆ 3年前まで学内でクラブを作つておりました。テキストは“Esperanto por Infanoj”でした。しかし、私の指導力の足りなさ、生徒の忍耐力の弱さで、今は休んでおります。

(S-ro 中林邦夫；旭川市4条23丁目 高橋方)

☆ Ofte pri vi mi aŭdas kaj vidas sur gazeto, kaj ĝojas por nia Sankta Movado. Sed ce mi ĝiam estas mallaboreme, hontinde. DO, fine mi deziras vian pli sanon kaj grandan sukceson de la kongreso.

(S-ro 土田虎幸；小樽市清水町34)

☆ 参上いたしたく存じましたが徳康すぐれませんでしたので失礼いたします。ご盛会をお祈り申し上げます。

(S-ro 高橋斗曇；岩内郡共和村大字前田11)

苫小牧エス会 星田 淳

富山での今次大会について公式には protokolo が Revuo Orienta など  
に発表されるだろう。以下感じたことを思いつくままに書いてみたい。

苫小牧からの2人は、8月16日午後2時函館着、ちよつと時間があるのでS-ro 吉田を訪ねたところ、一足先に富山へ向け出発したとのこと。結局、車中で一緒になって17日20頃、富山におりたつた。

PR……改札口へ歩きながら見廻すとホーム出口近くに BONVENON の札  
まな、宿舎、会場へのコースをかいて立看板。市民へのPRは相当行きと  
どいているようで、Verda stelo の名札をつけていると、ESPの方です  
ねと市民から話しかけられたり、山小屋でも一般登山者がESPにつき質問  
する等のことが多かった。

お国自慢……総参加者350位、うち出席者240とかきいたが、この人数  
もあまり多くない集會に、県知事はじめ教育長(Ino)、立山町長、キラ星  
の如く(?)姿を見せたのはちよつと驚いた。きけば、知事自身かつてESP  
にちよつとふれたことがあるとか。

電力全国一、教育も全国一……の富山のお国自慢も適当にふりまいて愉快  
な挨拶だった。

Varmeco……涼しい北海道から本州へ行くと暑さが身にこたえる。大会の  
18、19日ともいい天気、日中気温35°までのぼる。Fakkunsido  
にも出ず雑物のかけで ventumilo をベタベタ……という姿が多くなる。  
食堂で、ミルク、米水、ビール……涼しくなるつもりでとつたものみなた  
たまち汗となつて、かえつて暑くなる始末。

La tempo mankas……この大会に参加した komencanto でも、おそら  
くおぼえたのではないかと思われるのがこの言葉である。才1日18日の  
programoでは、各地方ブロック、専門団体の運動報告、才50回世界エ  
スベラント大会組織報告が全部で1時間につめこまれているし、才2日には  
6つの propozoj についての提案審議決定がこれまた1時間である。  
"Bonvole raportu koncize, ĉar la tempo mankas……"といつた  
調子で、聴客の間にさかんに入る。立山荘での Fakkunsido の報告の際



も "Ĉiuj raportantoj finu raporton dum du minutoj". と制限時間がつく始末。当然これに対する批判として "La kongreso estas kompleta en procedo, sed la enhavo mankas..." (伊東三郎) "La tempo tute mankis, tion mi profunde bedaŭras" (Laborista Fakkunsido 報告) などの言葉が出てくるのも無理もなかつたし、これに対する共感の拍手もかなり多かつた。

遊ぶためのみにあらず……今次大会には相当多くの junulo』の姿がみられた。学生も多かつた。折から登山ブームが叫ばれている時とて、「立山にひかれて集まつた……」と考える人も多かつたらしい。専ら、大会協賛会には出ず、立山へ会場を移す時になつて到着した junulino』もあつたが大部分の空気はちよつとちがつていたようだ。Studenta, Junulara の Fakkunsido』は特に活ばつたつたし、話しがれなかつた分は宿舎にもちこまれた。

「……いや、若い連中なかなか熱心ですよ。ゆうべも夜になつてどこかあいている部屋はないかといつてきて、集つておそくまでさかんに討議していましたが、皆山にひかれて遊び半分できたのかと思つたが、そうじやないようですね……。」とはある役員の話

Junulara Fakkunsido で Japana Esperanta Junulara Organizo の 1年後の発足をめざし活動することを決定した。この Juna pasio が日本の Esperantujo』に Nova Sento をふきこみ、全国の movado の前進と組織化の大きな源動力となることを望みたい。

集中豪雨上の立山……立山荘に入つたとき(15日夜)は雨がばらついていた。ラジオは北美濃地震を報じていた。ちよつとそのころは電車の中で気がつかなくなつたらしい。夜に入つてユサユサと余震にびつくりさせられた。20日立山荘を出、天ぐ平～空堂へと向うころは、立山連嶽のあたりいただきを雲にかくされながら、だんだんと遠くなつてくる。湖に空は明るかつたが、一の越の小屋へ来るともう霧というより雨といった方がいいものが吹きつけてくる。ただ足もとだけを見て立山雄山へ。頂上での寒さ、神社参拝料 50円払い、お札をもらい、オミキで少し体を暖める。同じ岩のガラガラ道をふみ、トウキクリンドウ、チシマギキヨウなどをながめつつ剣御前へ。夜ラジオでは新潟県下集中豪雨、鉄道各地で不通。われわれは

豪雨の上にしたわけだ。

当てるA班……登山隊は、A（婦人、足弱組）、B（健脚組）、B'（健脚コース頂上から日帰り）の3隊に分れた。Bのわれわれが21日朝青島沢へ下るとき、A班は立山の尾根を登っていたが、その頃急に雲が切れて青空があらわれた。それつと、一の越へ大廻りしたら、また雲。黒部溪谷の向う針ノ木あたりがちらちらみえるだけ。A班はちようど30分位稜線で晴れに合い、富士山以外はみんな……指、穂高まで見えたとか。全然ついでいたらしい。

北海道大会決議について……先の北海道大会での決議を大会提案するよう委任されましたのでその点について。まず、Verda Insignoを見やすくする件は、学会維持員会で要諦として出したが、一応聞きおかれた程度。白地に緑星のはつきりしたInsignoはT.E.K. (Tokia ESP Klubo)を出しているそうです。なお、オリンピック参加者へのESP学習報告の件は同趣旨のものが東海エスプラント連盟から提案され、大会協議会で承認されました。

☆☆☆☆☆☆

日本大会初参加の記

苫小牧エス会 北島 殿

Revoで日本大会があることを知った時から、何とかして参加したいという希望を持った。しかし、Esperantoを習い始めて1年もたつていない私には、あまりにも大きな希望で、誰かと一緒でなければとても心細いだろう。しかし、でき得る限りこのような機会になれることも大切だと密着してはいたけれども決心がつかかねていたけれど、Evidantoが参加するという事なので同行することにした。

16日朝出発、途中函館での待時間を利用して、まだ一度もあつたことのないE-ro Josida宅を尋ねていつたが、昨夜の船で富山へ出発されていた。富山に近くなつてから、同じ列車にそれもわれわれの席の3つうしろの席にE-ro Josidaが乗っていることに気がつく。日が暮れてしまつた富山駅に列車がすべりこみ、やつと静憚りにたどりつたという安心と明日からの不

安とが交鎖する妙な感情におそわれたが、駅の出口近くにわれわれを歓迎する大きな看板を見た時には、やはり出かけて来てよかつたという感情がわいてきた。

予想以上に参加者が多かつたとかで、すでに寝床は満員、個室に割り込ませてもらう。東京からの malnova esperantistino S-ino Ūada と福井の F-ino と同室、車中の汚れを洗い流すひまももどかしく話しはじめる。大阪の S-ro Kojima を交え、隣室の高校生 F-ino Macuda と共に…。初対面であるのにすでに何 10 年も前からの知り合いのような心易さを覚える。そしてやはり同志なんだという感を強くする。S-ro Kojima と S-ino Ūada が、われわれがまだ生れていない頃の、また、ほんとうに子どもの頃の Esperanto 運動についてはなし、どのようにしてこの運動を拡げていつたらよいかということ、経験をとおして話してくれる。時のたつのも忘れて……時計の針はすでに 17 日を過ぎ 18 日へと進んでいた……。

18 日は上天気、大会場の富山大学へ…… S-ino Ūada の隣りに席をとる。定刻開会、La Espero 合唱、感激は一入である。来賓の挨拶以外は tute esperanto、おおよその意味がわかる程度、はじめての経験と不勉強さ故に理解できないのが残念。午後は、分科会開催までの時間を青森からの malnova esperantistino S-ino Saitoo と話しをする。他に同志がいない中で 1 人でやつているという話をきいて、私のように良い指導者に恵まれている者はもつと頑張らなければと思つた。分科会は婦人の部に出席何かしら心細い。ただ 1 人大派にはおとり出された子どもの気持にも似ている。14 人集まつた中にこれから始めようとする人が 6 人もいて少しばかり意を強くする。自己紹介も esperante のもの、japane のものとさまざま、あとは日本語でということ話し始める。まずオ 1 に、来年の大会には今日集まつた者は必ず出席するように心掛ける。そしてそれまでには自分のことについてだけでも話せるようになることを申し合わせる。次に、婦人の小さな力でも何らかの方法で結集してわれわれの運動を盛んにしなければならぬが、その方法は？、など、時間がすぎても話しはつきない。

夜、宿舎で、若小で初めて esperanto をやられた福井の渡部ご夫妻にあう。25 年の隔りをもつて再びともされたこの盤をたやすことなく燃し続けていくのがわれわれのつとめのように思う。そして、S-ro Josida が告

小牧を訪れた最初の esperantisto であることがわかり、その奇縁におどろいた。

2日目の会場への車中で愛知の S-ro Macubara から言われた忘れられない言葉がある。初対面なので、まず "Mi estas ……." と自己紹介、続けて "ankoraŭ mi estas komencanto" と口から出る。私に次いで他の人も同様なことを言った。とたんに "Ne! vi ne estas komencanto, ĉar nun vi porolis esperanton", 例え一言でも知つていれぱすでに komencanto ではないということ、そしてそういう考えは早く捨ててしまう必要があること、例え一言でも二言でも esperanto で話すように心掛けるべきだということである。

北海道からという物珍らしさが手伝つてか、いろいろな人から話しかけられる。malnovaĵ esperantistoj からは札幌の方の消息をきかれるが、ほとんど名前だけより知らない人のことばかり。エスペラントをはじめて1年もたつていない私には無理のないことではあるけれど、これからは機会をとらえてそうした方々のご指図を仰ぎたいものと思う。午後からは、みだが原高原へ、北国産の私には 2000 m の高原に来て生き返つたような気持だつた。

Postkongreso では健脚組にまじつて B コースを遊ぶ。10年来この日は雨が降らないという統計があつたせうだけれども、あいにくと雨模様、日本中のエスペラントが集まつたので山の裾が恐れをなして姿をかくしたのだらうと笑いながら、渡部ご夫妻、S-ino Ŝada と再会を約して立山へ出発。視界のあまりきかない登山ではあるが実に楽しい。山小屋に泊つてその気分はますます昂まる。本当にはだをつき合わせて話したのしき、北海道分、富山分、山井の話にまで発展する。翌朝、剣岳へ登る予定を断念して山を下りた。雨にたたかれたながらの立山登山も、大会のことと共に私には生誕忘れられない思い出となり、また、これからの励みともなるであらう。

S-ro Joŝida が、最初に参加した大会の印象が今後随分影響するということ話を下さり、私のために非常に良く氣を使つて下さつた。このような皆の温い心遣いをいただいて有意義にすごすことができたことは本当に幸せであつた。そしてこれらの人々のご親切に報いるために1日も早くよりましき esperantistino にならなければという感を更に強くした。

1961年日本大会青年分科会決議。これによつて各地に青年エスペランチスト組織が生まれ、日本エスペラント運動の推進力たるべく活動を始めている。1962年北海道大会(苫小牧)参加者には資料として配布したが、学習もかね、組織文獻として再録する。

### Junuloj havu sian organizaĵon!

Ĝis nun la junaj esperantistoj en Japanujo ne havis sian propran organizaĵon, per kiu ili povas interkonigi, amikiĝi kaj kunlabori por la komuna celo de la Esperantismo. Tio estis manko en la Japana Esperanto-movado. Ni antaŭvidas, ke en 1965 la Universala Kongreso okazos en Tokio, kaj ke ĝi bezonigos al la junaj gesamideanoj multajn klopodojn ne nur por la sukcesigo de la Kongreso mem sed ankaŭ por la disvastigo kaj firmigo de amikeco kaj solidareco inter la aziaj kaj tutmondaj esperantistoj de la juna generacio. El tiaj konsideroj ni deziras renovigi la karakteron de la Japana Esperanto-movado, penetrante en ĝin per niaj junulaj aktiveco kaj laboro---pozitiva kaj kolektiva.

Por efektiviĝi nian deziron ni, junaj esperantistoj, devas unucele kolektiĝi sub la Verda Stelo, sen antaŭjuĝoj pri la diferencoj de ideologio, intereso, sekso, klaso, ktp.

Fondi tian organizaĵon en Japanujo kaj lanĉi nian agadon per komuna partopreno estas ne nur la devo, sed la misio, kiun la japanaj junaj esperantistoj devas plenumi por la bono de la Esperanto-movado.

Jen kial ni alvokas al vi la fondon de Japana Esperantista Junulara Organizo (JEJO) kaj invites vian aligon.

Tojama, la 18-an de aŭgusto, 1961

Junulara Fakkunsido de la  
48-a Japana Kongreso  
de Esperantistoj

## 北海道を去るに当つて

東京都練馬区春日町1丁目2384

坂下清一

北海道エスベラント連盟から離れる機会に、一言お詫びやらご挨拶申し上げます。

まず、レオントードの週刊のおわび。La Movado や La Torço のように毎月立派な機関誌がでていますが、前者は関西、東海、九州各エスベラント連盟の合同機関誌で、広範囲なニュースと多彩な執筆陣と有能な編集者により毎月16頁位のガリ版が出ていますが、購読者も多く、H.E.L.のレオントードの発行とは比較になりません。学会のレヴオと肩を並べているのですから。後者は福井県エスベラント会の発行で、年購読料600円、編集発行人の伊藤己西三さんはじめベテランノイが研究発表や作文指導をしている真面目な機関誌。H.E.L.の会員は割合時間の余裕のある人が少ないので、研究発表或は原稿投稿される人が特定の人であり、その人たちも、学校を卒業されたり、官公吏で退職され実業につかれり、だんだんと原稿の集まりが少なくなつてきました。多くの人から頁数が少なく、リーフレットで良いから月1回位連絡紙を出すように要望があります。Leontoodoの誕生は、小樽エス会時代の山本昭二郎君が身を削つてのものであり、その後、自分の仕事を投げうつて育成したものをH.E.L.が引き継いだものなので、私としてはLeontoodoの名であまり薄いニュースだけのものも出せないと考えていました。

若い人たちが次から次へと現われている現状です。どうして新生面を開いた機関誌にして下さい。私としては大きさに考えなくとも皆どしどし原稿を送つていつでも苦勞なしに発行できるように編集者を応援してほしいと思います。

私は、大阪支店新設に伴い、会社の機構改革により本社が東京になつたので5月30日に移転します。札幌には支店があり、ときどき来ますから北海道と縁がきれたわけではありません。今後ともよろしくご交誼の程をお願いしてご挨拶いたします。

El la legendoj de la Ainoj en Hokkaidô

Noboru Hayakawa

Iam mi aŝskultis maljunulinon ĉe iu aina rondo en Urbeto Piratori, Hokkaidô, kiel jene:

"Ja certe okazis la faktoj en la plej malnovaj tempoj, laŭ nia kredebla tradicio, ke la plej supra dio en la ĉielo kreis la landon per la ŝpato antaŭe fabrikita de li mem el ia ulmo nomata 'ĉikisa-ni'. La dio, do, metis la ilon sur la plej alta monto de malnova Hokkaidô nomata aine 'Obūtate-sūke', japane 'Daisetuzan', kie enradikiĝis kaj kreis la ilo al la diinon en la figuro de belega kaj grandioza arbo. Jus tiam la jara dio nomata 'Pakor-kamuj', inspektis tien, kaj enamiĝinte en ŝin faris lin mem al la patro dio por ŝia gemaspekta knabo nomata 'Okikūrumi-kamuj'.

La patrindiino, do, pensis, ke estu pli bone la estimatan knabon guvernĝi ĉe la landofara dio en la ĉielo, kaj for de la montego vojaĝigis lin en ŝia teksita vesto nomata 'acuŝi', el la ŝelfibroĝ de la arbo 'ĉikisa-ni', kaj kun la glavo trezora zine nomata 'pirika ĉmuŝi'.

Bone naskiĝinte, ankaŭ 'Okikūrumi-kamuj', reciproke enamiĝis kun filindiino de la ĉieldio. Tiam ŝia patro dio ordonis al ili kiel jene: 'Ci estas la sola filino por mi, sendube. Pro tio, mi ne devas ĉin foririgi el la surteran homomondon.' Kaj, Okikūrumi-kamuj, vi estu la prepatro de la ainoj, kiu devas esti ĉe la homolando. Vi, pro tio, subeniru al la submondon, kaj tie instruu al la viroj la farmetodojn de la produktaĝoj, nome de pistujo kaj pistilo (al pluvmantelo el pajlo, glavingo,

kaj teksiloj. Due, mia filino, tie instruu kudradon por fari veston, kronon, kaj ĉirkaŭkolon, kaj tuj post ĝia finiĝo, revenu al ci tien, nome la ĉiel-landon.

La ĉieldio, do, ĝasis ilin subeniri al la teron. La prepatro de la ainoj kaj lia edzino, alveninte al la homlandon, ekvivadis sur la sakra monteto

'Hajopira', proksime de la supra fluo de la rivero 'Saru-gaŭa', kaj tie ili gvidadis la vivadojn de la ainoj diversmaniere: estimigi la diojn, multigi la semojn de ia ekinoklo en ilia kulturado, tradiciigi la epopeojn nomatajn 'Jukara' kaj ankaŭ la amokantojn nomatajn 'Jai-kara-kara', kaj foririgi la akcidentojn de la homa mondo. Ili, pro tio, akceptis profundan estimon el ĉiu flanko de la gento.

Tamen, poste venis la tempo, kiam ili ne devu tie restadi, ĉar la ainoj iom post iom diboĉemigis kaj finfine multefoje blasfemis la favorojn de iliaj dioj. Do, ili malĝojante foriris ien.

Sed tamen, ni ainoj daŭre ĝis nun neniam forgesis la nomon de nia prapatro 'Okikŭrumi-kamuj' kaj supozante lin kun bruligitaj glavangoekstremo kaj basko de 'acuŝi'-vesto, estimegas lin kiel la dion de tradicio aine nomata 'Oina-kamuj' aŭ 'A-e-oina-kamuj'. Liaj vivmanieroj estas varme konservitaj kiel la kutimoj de nia prapatro aine nomata 'ekasi-kerŭ-buri'".

(Fino)

(Rim.) Obutate-sike aŭ Oputate-ŝike estas monto nun troviĝanta en Daisetuzan Distrikto. La aina nomo por Daisetuzan estas "Nutaku-Kamuŝupe".

(Red.)

\* \* \* \* \*

Ĉe la drinkejo

Soozoo Sudoo (Murooran)

'Ĉiufoje, kiam mi drinkas sake'on, mi rememoras unu malĝojan rakonton', ekparolis al mi unu viro kaj drinkante daŭrigis.

'Ankaŭ mi ŝatas sakeon kompreneble, sed la viro, pri kiu mi rakontas de nun, pli ŝatis ĝin ol mi, kaj li estis nomata Funabasi, tiel mi povas memori.

Li fastadis pli ol unu semajno aŭ memvole estis batita de kaskado por ĉesigi drinkadon, sed, sed bedaŭrindege ĉio estis vana.

Malgraŭ liaj kolegoj inverse igis drinki senĉese por dutagoj, sekvantan tagon li drinkis



ĝin tiel, kiel nenio okazis al si.

En iu tago, la drinkemulo subite ekdiris sian volon edzigi. Liaj kolegoj tre surprizigis kaj priparolis, ke eĉ subveston de la edzino li fordrinkos, se li restos en nuna stato, kaj ili parolis al la virino, kiu volas edziniĝi kun li, sed la virino tuj respondis, 'jes, tio estas nenio al mi'.

Do ili havis geedzigan ceremonion. Ja kia surprizo! Funabaŝi batrompis ĉion por drinki, nome sakea boteleton, pokaletan k.t.p.

Eĉ viskion por festi forĵetis tute nedrinkante. Ho, bone li ŝanĝigis, tiel dirante liaj kolegoj gojis pri tio, sed tamen li nur ridetis.

Malmultaj jaroj pasis, kaj ili komforte vivis kun la infano, sed dua infano mortnaskiĝis. Tio alportis al li malbonan sekvon. Funabaŝi rekomencis drinki kiel antaŭe. En la komenco, la edzino permesis al li drinki iomete, sed li ne povis ĉesi en la kvanto, pro tio lia familio devis transloĝiĝi pli malgrandan domon. 'Kiel terura estas sakeo!' la viro tiel rakontante reenglutis iometan sakeon. 'Jam Funabaŝi neniel povis deteniĝi. Li vendis la komodon kaj eĉ televidon, kiun li ĵus aĉetis lastatempe, kaj ankaŭ ĉion, kio estas tuj monŝanĝebla.

Iun vesperon, li revenis al sia hejmo malfrue, kaj kiam li ekvidis la pordon ŝlositan, tuj batfrakasis fenestrovitron, tiam subite li sentis ĝason je la nazo. Kun surprizo li tre rapidege malfermis la pordon perforte, kaj li elvidis la edzinon kun infanon, kiuj fermis la okulojn.

Se li trovus gefamilianojn pli malfrue je kvin minutoj, ili mortus jam, tiel oni diris. En sekvan tago, li devis skribi ĵurpromeson al la edzino, ke de nun li tute ne drinkos sakeon. Lia edzino ricevis ĝin plorĝemante.

Dum tri tagoj li tute ne drinkis, sed, sed li ne povis plenumi la promeson, do pensadis pri diversaj rimedoj por drinki.

Najbarcambre loĝis novelisto, kiu skribis novelojn, kiujn oni tute ne aĉetas. La novelisto kutime skribis nokte kaj dormis tage.

Jes, tio estas bone! Li tuj promeniĝis gefamilianojn, kaj komencis trui la muron tiel, ke la truo interligu la du ĉambrojn. La truo kondukigis sub la skribtablo de la novelisto. Dum ĉirkaŭ tridek

minutoj, li finis la laboron tute, kaj eliris por drinki.

Tuj li konsumis tute la monojn, pro tio li ŝanĝis la superveston al mono, sĉd eĉ tion tuj konsumis por drinki, kaj ankaŭ la jakon same.

Li plene ĝuis bonhumoron ebrian kaj fine al li venis penso pri sia hejmo. Li vage pro sakeo revenis hejmen, tiam estis la dua horo de meznokto!.

La viro ekĝemis profunde, rigardante la sakeon kaj sekvigis la rakonton.

'Ĉu estas ebla tia ĉi malĝoja rakonto en la vivo! Liaj gefamilianoj ĉirkaŭprenante sin reciproke jam mortis pro gasveno. La kuracisto ne estis helpebla ilin. Sekvantan tagon li sinmortigis ensaltante sur relojn antaŭ alvenanta trajno.'

La viro finis la rakonton, kaj repostulis pluan sakeon je la sakea botelo. Sed, mi demandis lin, 'Ĉu la trueto estis truita?'

'Jes,' li respondis malĝojeme, tiun ĉi nokton la novelisto sinmortigis per gaso.

(La fino)

El semajna gazeto tradukita.



### H E L 新役員きまる

大会の席で、委員については委員長、副委員長に一任されていたが、62年度役員が次のように決定した。

|      |          |                 |
|------|----------|-----------------|
| 委員長  | 山賀 勇     | 小樽市花園町東3の11     |
| 副委員長 | 吉原 正八郎   | 札幌市南一条西12齊藤ビル   |
| 事務局長 | 高橋 達 治   | 小樽市汐見台町小樽海員学校   |
| 常務委員 | アリマ ヨシハル | 札幌市北24条西9       |
|      | 高橋 要 一   | 札幌市豊平5条9道営住宅933 |
|      | 永田 明 子   | 札幌市北16条西5 日高吉郎方 |
| 委 員  | 吉田 栄     | 函館市船見町43        |
|      | 平田 岩 雄   | 室蘭市東町東雲298号     |
|      | 藤井 沢 司   | 岩見次市4条西15       |
|      | 新田 為 男   | 夕張郡由仁町字三川       |
|      | 星 田 淳    | 苫小牧市王子北星寮       |

## 才 25 回北海道エスペラント大会報告

日 時 1961, 7, 23 AM9.00 ~ PM4.30

会 場 札幌市中島公園 豊平館大会議室

参加人員 出席参加 35 名、不在参加 21 名 計 56 名

午前 9 時受付開始、10 時 S-ro 高橋の司会で開会。ESPERO 台唱の後  
大会準備委員長 S-ro 相沢の挨拶、つづいて大会議長の選出については、  
事務局に一任され、協議の結果 S-ro 相沢が選ばれ、「盛会であつた昨年度  
大会について多大の努力をかたむけられた室蘭の同志に感謝の意を表し、  
今次大会に多数の参加を得たことを喜び、有意義に、かつ愉快に日程を終  
えることを熱望する」と挨拶。

祝辞、祝電披露……小樽の早川、中沢、室蘭の佐藤、北見 伊藤誠政、  
更別の辰己、イトムカ太倉、八雲 宮岸、滝川 岡本、土別 三田、小樽  
鈴木、東京 カモ、函館の吉田、小田島、長沼 由良、東京 東。それに  
在京中のアリの各氏から

自己紹介のあと地方会の事業報告がなされた。

◎ 札幌エスペラント会 吉原正八郎氏

◇1960年

9月10日 ESE 弁論大会及び講演会を小樽エス会と共催（市民会館）

(1) 講演「ESE について」吉原 ESE 会長

(2) 弁論……小樽ノ名、札幌 5 名参加、審査員には相沢、山崎、アリ  
マの各氏を委嘱

9月23日定山溪へ遠足（参加者 8 名）

11月20日 イランの S-ro Labib 歓迎会（吉原法律事務所）

11月23日 S-ro Labib の招待に応じて S.E.S. 会員 6 名でその  
宿舎バハイ・センターを訪問

12月15日 ザメンホフ祭（市民会館、参加者 17 名）

◇1961年

2月 アルゼンチン、エスペラント協会及びアメリカ・ポートランド  
と文通

3月16日 北海道新聞、取材のため木曜会を訪れる。

3月18日 道新「グループで楽しく」欄に木曜会の模様が写真入りで報道される。

3月23日 講習会開始（吉原法律事務所、毎週木曜、講師は高橋、木村）。エスペラントを学びたい人が増え、応急処置として木曜会を2部つくり、一方で講習会を始める。

4月7日 ドイツのS-ro Gunkel 歓迎会（吉原法律事務所、12名参加）

4月8日 S-ro Gunkel を白老まで案内

4月13日 今年度 S.E.S.総会（石田屋、19名参加）会長に吉原氏再選。

5月28日 才1回朝の Promenada Kunveno (9.00~11.00)

毎週日曜9時三越デパート前に集合、その時に応じて各所を散歩しながら会話の練習をすることがその目的。

6月22日 磯部幸子氏木曜会に出席

7月12日 Ges-roj Cornet 来札

8月下旬 西里静彦氏アメリカに研究のため留学決定

◎ 北大エスペラント会 西里静彦氏

Mi tre bedaŭras raportti, ke ni jam ne haves la societon en Hokkaido Universitato. Lastjare ĝuste antaŭ ol ni okazigis elementan kurson ĉe Hkudai Center, mi retirigis de la posteno de prezidant pro mia okupeco, ankaŭ por metaboligi kaj renovigi la organizon. Tiam S-ro Hasimoto fariĝis nova prezidanto de la societo, sed la rezulto de metabolad ne favoris la organizon, tio estas, tiu ĉi jare la nomo de Hokudai Esperanto-Societo estas strekita for de la listo de studentaj kluboj kaj konsekvence la Societo jam ne sin trovas en la Universitato. Estas granda bedaŭro por mi raportti estingiĝon de kluba agado, kaj samtempe por via granda favoreco, kun kiu vi kuraĝigis nin por ses jaroj, mi anstataŭ ĉiuj elkore vin dankas.

◎ 苫小牧エスペラント会 星田 淳氏

1960年9月15日から才1回初等講習会。17名参加、12・3名残る。

1961年4月13日 苫小牧エスペラント会結成。H.E.L.加盟。5月19日から才2回初等講習会。参加者17名。なお、1961年初頭から初等講習終了者で中等講習。その間に7月14日、会員4名、その他3名計7名で羊蹄登山もやつた。8月には大雪縦走、富山の日本エスペラント大会参加の予定。

◎ 室蘭エスペラント会 平田岩雄氏

- 1 毎週金曜日午後6時から8時まで富士鉄労働会館で例会を開催  
古い会員はエロシエンコの落架物語、落ちるための塔の論議会、新しい会員は三宅初級読本で講習を続ける。例会出席者は12名平均。
- 2 12月26日 ザメンホフ祭を開運寮で開催。12人参加。
- 3 4月8日 S-ro Gunkelの歓迎会を平田宅で開催、8名参加
- 4 5月14日 苫小牧エス会と合同で登別クツタラ湖にエクスタルソを実施。参加24名。
- 5 5月9日、10日の両日国鉄労組東室蘭分会の労働文化祭にエス文通による絵ハガキ、手紙などを展示
- 6 6月14日、15日室蘭工業大学明德寮記念祭に同じくエス文通による絵ハガキ、手紙、エス原書等展示。いずれも好評を博す。  
なお、会の事業ではないが、会員村木昭徳君が7月10日から1週間長野野野辺山で開催の会話訓練の合宿に参加した。

◎ 藤短期大学エスペラント・グループ 山崎久蔵氏

◎ 小樽エスペラント会 江口音吉氏

◎ 江別エスペラント会 松尾文夫氏

これで午前中のプログラムを終り、記念さつ影の後昼食。午後1時30分大会協議会を再開、提案議題の討議に入る。

- 1 ESRによる本道観光用gvidlibroの編纂と、しかるべき機会におけるその発行について(小樽 早川 昇)

討議の結果本旨については全員の賛成を得たが、内容その他発行に要する諸準備については十分研究する必要があるとしてH.E.L.常任委員会に付託

- 2 緑星章の改良を J. E. I に勧告する件 (札幌エスベラント会)  
才 25 回道大会の決議として今年の日本大会 J. E. I 総会に提案することに決定。
- 3 1965 年東京で開催される世界大会の前に北海道で日本大会を開催してはどうか (更別村親和 辰己清美氏)  
世界大会参加のための経費や時期について難点があるとして更に研究することになった。
- 4 明年度 26 回道大会開催地決定について (札幌エス会)  
才 / 候補として苫小牧をあげ、苫小牧としては一応持帰り態度を決定。  
この決定は H. E. L に一任する。
- 5 東京オリンピック参加の外国選手に対し E S E を学習して来るように働きかけよ (札幌 木村喜壬治氏)  
満場の賛同を得て日本大会に提案することに決定。

以上で大会協議会を終り、H. E. L 年次総会に移り、相沢事務局長議長となり議案の審議にあたる。

☆ H. E. L 総会議題

- 1 H. E. L の加盟は団体単位にしてはどうか (札幌 木村喜壬治氏)  
H. E. L 本来の形態としてその構成は団体単位であるべきとして
  - (1) 加盟は地方会単位とし各加盟団体はその構成会員数に応じ / 名年額 100 円宛の会費を負担納入すること。
  - (2) 地方会未結成地域からの加盟は単独加盟として 1 名年額 100 円宛の会費を納入すること。

◇ H. E. L の性格からそうあるべきだが、構成員の消長がはげしい地方会の現状では困難な点が多いという意見が続出して委員会で研究することになった。
- 2 H. E. L 機関誌 Leontodo の改題について (札幌 木村喜壬治氏)  
経費、原稿の問題を勘案して Leontodo を廃止して季刊 informilo 程度のものを発行してはどうかと提案説明があり、いろいろの意見があつて討議の結果、財政的基礎が確立されるまで休刊もやむを得ないが存置することとし、地方会状況報告、連絡の便宜のため年数回 informilo を発行することについてその研究方を委員会に付託された。

3 H.E.L事務所所在場所変更について

札幌エス会会長吉原正八郎氏の承諾を得ることができれば変更することに決定。

新事務所予定場所 札幌市南1条西13丁目斉藤ビル  
吉原法律事務所 領付

4 H.E.L役員選任

- 委員長 坂下清一(札幌)  
副委員長 吉原正八郎(札幌)  
事務局長 相沢治雄(札幌)  
常任委員 星田淳(苫小牧)、菅原鉄雄(室蘭)、アリマ・ヨシヘル、木村喜王治、永田明子、高橋要一(札幌)  
委員 吉田榮(函館)、高橋選治(小樽)、猪股嘉治(江別)、武田二郎(岩見沢)、新田為男(由仁)、竹吉正広(旭川)、須藤朝三(室蘭)、村木昭徳(室蘭)、茂庭泰子(苫小牧)

以上をもって大会全日程をおわり amikeca kunsido に移り、午後4時30分明年の再会を約し散会した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

才25回大会会計報告

| 収入の部  |                  | 支出の部  |                |
|-------|------------------|-------|----------------|
| 大会参加費 | 150×36<br>5,200円 | 会場費   | 2,200円         |
| 不在参加費 | 100×16<br>1,600  | 昼食費   | 55×40<br>2,200 |
| 昼食会費  | 150×35<br>5,250  | 菓子代   | 50×40<br>2,000 |
| 写真代   | 50×35<br>1,750   | 写真代   | 30×50<br>1,500 |
| 寄附金   | 3,000            | 通信費   | 1,920          |
| 繰取    | 360              | 事務用品費 | 1,750          |
| 計     | 17,760           | 計     | 11,750         |

差引残額 17,760 - 11,750 = 6,010円 (H.E.L領付)

(寄附内訳)

小樽エス会 1,000円、吉田榮 1,000円、平田岩端 200円、伊藤誠教 50円  
大倉正 30円、茂庭泰子 300円 計3,000円

オ 25 回北海道エスペラント大会参加者名簿

(・印は不在参加)

|        |                      |
|--------|----------------------|
| 平田岩雄   | 室蘭市東町東雲 298          |
| 末永頭二   | " 知利別町白楊寮            |
| 小林陽子   | " 知利別町 269           |
| 山田つゆ   | " 母恋南町 32番地          |
| 村木昭徳   | " 水元町 1番地            |
| 須藤昭三   | " 東町大和 347           |
| 酒井幸枝   | " 輪西町 286            |
| ・佐藤真由美 | 札幌市登別町字上鷺別 35        |
| ・菅原鉄雄  | 室蘭市輪西町               |
| 星田淳    | 苫小牧市王子町王子北光寮         |
| 北島瞳    | " 東町 1               |
| 京極昌子   | " 王子中部 6区 B7アパート 131 |
| 野中よし子  | " 錦町 53              |
| 戸田幸子   | " 字沼の端               |
| 茂庭泰子   | 勇払郡早来町字遠浅            |
| ・吉田栄   | 函館上船見町 43            |
| ・小田島栄  | 上磯郡上磯町字久根別           |
| 山賀勇    | 小樽市花園町東 3丁目 11番地     |
| 江口音吉   | " 奥沢町 4丁目 22番地       |
| 横山良勝   | " 梅ヶ枝町 44番地          |
| 佐藤不二雄  | " 南赤岩町 25番地          |
| 小谷ユメ子  | " 松ヶ枝町 6番地           |
| 菊地義雄   | " 稲穂町西 4丁目 3番地       |
| 吉原正八郎  | 札幌市生徒団地 801          |
| 山崎久蔵   | " 北 26条西 8丁目         |
| 斉藤亀代二  | " 北 19条西 5丁目 20番地    |
| 相沢治雄   | " 藤野 1区              |
| 木村喜正治  | " 大通東 8丁目 1番地        |
| 西星静彦   | " 南 16条西 5丁目         |



|          |                      |
|----------|----------------------|
| 大川 健治    | 札幌市南14条西6丁目富士荘内      |
| 高橋 要一    | " 豊平5条9丁目道管住宅933号    |
| 中川 基     | " 豊平町定山溪2区           |
| 永田 明子    | " 北16条西5丁目 日高吉郎方     |
| 増田 泰子    | " 琴似町宮の森12           |
| 嶺 正子     | " 南24条西9丁目           |
| 三馬 悦子    | " 南12条西13丁目          |
| 東 隆      | " 北2条西26丁目           |
| 坂下 清一    | " 大通東9丁目             |
| 佐藤 実     | " 南29条西9丁目郵政アパート443  |
| アリマ ヨシヘル | " 南3条西2丁目 南3条アパート513 |
| 見玉 広夫    | 岩見沢市 空知支庁地方部総務課地方係長  |
| 後藤 義治    | 札幌市北8条西6丁目道新北8寮      |



LEONTODOとLIGOKOTIZOについて

- ☆ 大会できまつたように、この号は苫小牧エス会で編集した。
- ☆ 来号からは、小樽に移つたH.E.L.事務局で編集することになる。
- ☆ 今度からは1年4回発行…の原則を実行することになるはず。
- ☆ 1年以上の休刊の間に原稿がたまつているとはいえ、カビの生えたものあり、frešaj artikolojを待つこと切!
- ☆ ところでkotizoの件だが、1年間 nenionfarante では…従つて'61年分会費はnulとする。'61年分としていただいた会費はそのまま'62年にもちこす。そして、年4回発行を原則として、会費は年200円となるわけ。よろしくご協力を!

## 編 集 後 記

- ☆ 大会でもいろいろ論議があつたが、H.E.L.は日常何をすべきか？。年1回の大会主催は当然だが、実のところその現地の会がやることである。北海道の Esperantisto をひとつに結ぶための組織であれば、どうしても機関誌は欠かされない。機関誌なくして LIGO の活動はないのである。
- ☆ 1年間すえおかれた原稿のうちボツにしたり後に廻したのも多かつた。今度は原稿が余つたが、この次からは、地方会報告、意見、作品等々、どんどん皆で寄稿して、ほんとうにわれわれの Leontodo にしていきたい。
- ☆ H.E.L.事務局は小樽へ移り Leontodo もこの次からそこで編集される。生れ故郷へ帰つたわけだ。今後年4回発行を果すために皆でもりあげていこう。
- ☆ この号は苦小牧で発行されたが、この全文タイプ印刷は、会員である2人の tajpistinoj F-ino 北島(市役所)、茂庭(太洋社神保印刷所)の手になつたもの。ESP文は S-ro 星田、Koregan Dankon!
- ☆ 今号の編集は、全くイキアタリバツタリ。悩まされたのは「きみだれ原稿」である。大会の後、札幌からの原稿がなかなか来ず、F-1<sup>st</sup>北島が受とつてきたのが8月11日、タイプ打ちが終つたのがその1週間後、ここでさつと印刷できれば48頁ですんだのだが、昨年の25回大会記録も入れようと S-ro 高橋から送つてもらつてこれを編集、これに小樽から ESE文、「一初心者」の手紙、更に室蘭から ESP文……次々に集まつて、つぎたしつぎたしの編集で、遂に66頁にまでふくれ上つた。
- ☆ ESE文のうち、明らかに誤りとわかるものは本人の委任によつて訂正した。ESP作文への批判、意見も歓迎したい。特に多い誤りは l と r の誤りで、これはベテラーノ、コメントアント共にかなりある。平素から正しい発音をしていない証拠といえよう。
- ☆ 遠く根室の S-ro 榎木から次のような希望が寄せられてきた。
- (1) 道内各エス会の現状(会員数、会費予算、会則、運営方法等)
  - (2) 24号まで続いた「E.O.による北海道のエス界」どなたか続けて下さい。次号からの編集、よろしく願ひします。
- ☆ 次回は12月発行の予定。原稿は小樽市花園町山賀勇方連盟事務局へ！

|                                                                                              |    |
|----------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| ANTAŬPAROLO .....                                                                            | 1  |
| 甲辞 脇坂さんを送る言葉 .....                                                                           | 2  |
| Dormu trankvile por eterne sub la verda stelo,<br>nia estimata samideano S-ro Wakicaka ..... | 3  |
| T. E. L. S.からのたより .....                                                                      | 6  |
| 冬期エスペラント強化合宿に参加して(1961.12.24) .....                                                          | 7  |
| Disciplinado por parolkapablo de Espに参加して .....                                              | 8  |
| ジャンルさん同行記                                                                                    |    |
| 札幌 ~ 苫小牧のまき .....                                                                            | 2  |
| 苫小牧 ~ 白老 ~ 室蘭のまき .....                                                                       | 4  |
| はじめて外国のsamideanoに接して .....                                                                   | 17 |
| GAMECULOJ VOJAĜAS! .....                                                                     | 18 |
| へき地の初心者からH.E.L.に望む .....                                                                     | 23 |
| Floru bele la amikeco! .....                                                                 | 24 |
| オ26回北海道エスペラント大会 .....                                                                        | 25 |
| 会計報告 .....                                                                                   | 31 |
| 参加者名簿 .....                                                                                  | 32 |
| 北海道大会を主催して .....                                                                             | 4  |
| IMPRESO de la 26a Kongreso de Hokkaido Esp-istoj .....                                       | 35 |
| はじめてESP-A EKSPozICIENtoを開催して .....                                                           | 39 |
| アメリカだより .....                                                                                | 39 |
| Esperanto tra la Mondo .....                                                                 | 43 |
| Voĉoj de izolitaj samideanoj .....                                                           | 45 |
| オ48回日本ESP大会印象記(1961.8.18-19) .....                                                           | 47 |
| 日本大会初参加の記 .....                                                                              | 49 |
| ALVAKO... Junuloj havu sian organizaĵon! .....                                               | 52 |
| 北海道を去るに当つて .....                                                                             | 53 |
| El la legendoj de la Ainoj en Hokkaido .....                                                 | 54 |
| Ĉe la drinkejo .....                                                                         | 55 |
| H.E.L.新役員きまる .....                                                                           | 57 |
| オ25回北海道エスペラント大会報告 .....                                                                      | 58 |
| 会計報告 .....                                                                                   | 62 |
| 参加者名簿 .....                                                                                  | 63 |
| LEONTODOとLIGOKOTIZOについて .....                                                                | 66 |
| 編集後記                                                                                         |    |
| ENHAVO                                                                                       |    |

# LEONTODO

N-10 25-26

発 行 者 北海道エスペラント連盟 (H.E.L.)  
発 行 日 1962年9月15日  
編 集 者 苫小牧エスペラント会